

# 翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(七)

—四国落・常繁問答・烏帽子折・正尊—

服部 幸造

入鹿・日本記・笛の巻・文学—(名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第15号 二〇〇三年十一月)

## (四国落)

(承) 翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(一) —夜討曾我・信田・十番切・大臣—(名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第9号 二〇〇〇年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(二) —兵庫・はま出・清重・俊寛・新曲・やしま—(名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第10号 二〇〇一年三月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(三) —安宅・一満箱王・景清—(名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第11号 二〇〇一年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(四) —未来記・腰越・鞍馬出・馬揃・高館—(名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第12号 二〇〇二年三月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(五) —伏見常繁・小袖乞・しつか—(名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第13号 二〇〇二年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(六) —元服曾我・名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

去間判官殿内裏を退出まし〜て。堀河殿に移らせ給ふ。帝の宣旨をかうふり。よし経みやこにあらん事いちよくのしんと存也。旅の立出をかまへよ。承ると申て。むねとの兵者二百余騎すくつて都の内をそ出られける。「サシクトキ」十二人の北方も御供なりとそしたはれける。義経聞召れてこはいかによし経は。関東の頼朝よりふけうの身に候らへは。いつくにてもし経かうたれん事は治定なり。「コトハ」さあらん時は中々に。御前ぐそくし奉り。そもなき遠嶋に(1才)捨をき申さはよし経か。跡の弓矢の疵たるへし。只々とまり給へ「サシ」十二人の北の方。此由を聞き召れて。たとひりうたつ山のおく。死出三途の河なりとも。ともにこかれはうかるまし。とまるましの都やとて先にそ立せ。給ひける。「コトハ」きけい聞き召れて。したふもひとつ道理。「サシ」誰を頼みて松浦ひめ。都にとゝめ置ならは。道のさはりと成へし。きれともきらぬあひよくの。うき身のさはりは是成とて。式百余騎の人々は。「フシ同」おこしを中に。取こめて泪と(1ウ)

ともに。立出る。是や延喜の。せいたひに。家をはなれてさんしげつ。おつる涙ははくせんかう。万事は皆。夢のことしより〜ひそうをあをくと。詠し給ひし旧跡と。今のぎけいのはいるの旅。すかたはいつ

れ。かはるとも思ひはさなからひとつなり。すゑは山さき高良寺。かうないかちおり過ければ。しどろ。もとろに。らんもんしあら六。かしやあく田川。手嶋瀬川はんじやうじ。みのお山の。紅葉にこゝろのとまる折ふし。又打出れは西の宮。南宮の御前の。沖のあら(2才)ゑびす。松原殿の御さんさう。むかし恋しとうちなかめ。かすむ浦ぢは。住吉の霧の。隙より松見えて。波にたゝよふあま小舟。心ほそしと。打なかめはや大物のうらにつく。「コトハ」弁慶申けるやうは。これより西国方への御下向は。難所岩石にて。御こしの陸路。ゆめく叶ひ候まし。是より御舟にめされ。四国へわたり。伊与のかうのをお頼あつて。あれにしはらく御さ有て。世のあり様を御らんせられ候らへ。四国九州。一円に思ひ付申さは。十万余(2ウ)騎は候へし。其時都へ責上り。ざんじんのともがらをことくぐほろほし。などか今一度。御代にたゝせ給はては候へき。判官聞し召れて。さあらは舟を用意せよ。承ると申て。むねとの大船八そうに。十二人の北の方。御供の人々二百余騎。思ひく心々にとり乗て。追而の風を待程に。日も長閑なり出せとて。ともつなといしておし出す。誠に順風はよかりけり。二時計の事なるに。音に聞えたる。和田のみさきを「カ、ルモンタイ」心ほそくもはしり過く弓手を(3才)見ればえ嶋か磯く馬手は明石の人丸のく雨のふるよもくふらぬよも「フシ同」風の立よもたゝぬよも。嶋かくれ行海士小舟。心ほそしと打詠。尾上高砂。過ければ室の。沖にそ着にける「コトハ」判官仰けるやうは。いかにや水主梶取共。爰かしこの津泊にて。中々

舟をよするならば。自然の事も有へし。随分よくは此舟をたゝ直にわたせとの御諛なり。承ると申て。梶とりなをし御ざ舟を四国をさいて押渡す。かゝりける処に。さぬ(3ウ)きの八嶋の上よりも。黒雲一つきたつて悪風こそおこりけれ。水主申ける様は。いかさま悪風のおこらん哉覽も。雲の気色らんでんし。海の表どうようし。白波せがいをあらひ候いかゝはせんと申す。判官聞召れへて。某もさ存し。去年八嶋へむかひしとき。渡辺よりも舟にのり。おし出したる風雲にちつともちはぬけうあひなり。舟によくのれ用意せよ。夜舟にならば此舟。いかさまかせにさそはれて。舟人共に失ぬへし。縦風かはげしくとも。とちうをさい(4才)てやつてみよ。猶しも風かはけしくは。木中帆かけてはしらせよ。それにも叶はぬ物ならば。帆柱計てやつてみよ。おもかぢをつよくとり梶をよはくとつて。わいろをたて。気色を見て。四国をさいてやつてみよや梶取共とそ仰ける「カ、ルツメ」承ると申けれ共。よつき程の風にこそ「同」おもふさまにはあつかはるれ此悪風と申は。津の国の武庫山風。きの国の岩山風四国の白嶺山よりも。おつこつたるあく風にてへいくとしたる。海の表に俄に谷嶺いて(4ウ)きて。白なみせがひをあらふなり。水主梶取共。ろかひ取へきやうはなし。十二人の北の方。近衆の人くは舟そこにひれふして。さなから前後をわきまへす。懸りける処に。四方より悪風か。もみ合て吹風に。ほはしら二つに吹おつて八艘のも相の綱か一度にはらりとされたりける「フシ同」かせにとられて舟共か。思ひくにおとさるゝ。

四国へおとす。舟もあり西国へ落す舟もあり。土佐の湊へ落すも有。或は本の。明石など。兵庫か沖へ落すもあり(5才)

八そうの。舟共か皆。ちり／＼に。成にけり「クトキ」あらいたはしや太将の御座舟には。十二人の北の方近衆の人々三十人。あらき波にはあてられつ。さなから前後をわきまへす。やう／＼残る人とは。義経弁慶只二人。舟の前後をあつかひて。風にまか。せておとさる。心さしこそ。哀なれ「コトハ」弁慶申ける様は。それ風は龍王の。出し給へる息として。時のふしきをなし給ふに。宝をしつめて御らんせられ候らへ。さらは宝をしつめよとて「カ、ルモンタイ」十二人の北の方の。／＼重の(5ウ)

小袖紅の。／＼ちしほの袴判官の。／＼こかね作りの。／＼御はかせ「フシ同」海底に沈め。給ひけり。本よりも此人々。寺そたちのがくしやうにて。法花経の一の巻とき。うつる程こそじゆせられけれ。まことに龍王も御納。受やまし／＼けん。波風少。しつまれば舟は。小波に。ゆりすゆる「コトハ」か／＼りける処に。讃岐の八嶋の上よりも。唐笠ほどの光り物か。七つ八つとんできて又悪風こそおこりけれ。弁慶是をみて。た／＼ことならず思ひ。舟底につつと入。頭巾鈴懸打かけ(6才)

。舟のへいたにつつ立あかつて大音あげて呼はる。た／＼今爰に。す／＼み出たる兵者を如何成者と思ふそ。小野の高村。右大臣かばつそん。田辺の別当丹宗か嫡子。生る／＼所は出雲の国。枕木の里。そたつ所は三条京極「カ、ルツメ」学文するは天台山「同」あくま剛伏の貴

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

僧と生れ。それ風は龍王の。出し給へる息として。時のふしきをなし給ふ。しんぞき給へと云ま／＼に。いらたか珠数を取出し。さら／＼とおしもんで。東方に降三世明王南方に。くだりやしや(6ウ)

明王西方に。大威徳明王。北方金剛。夜叉明王中央大聖。不動明王。けんがしんじや。ほつほだいしもんがみやうしやだんほくしゆせん。ちやうがせつしやとく大ちゑちかしんしや則身成仏と。この真言のひんみつにてくる煙を立て折られた。まことに龍王もさて悪霊も。御納受やまし／＼けん波風少しつまれば舟は小波にゆりすゆる「コトハ」か／＼る刻に平家の悪霊達。其数あまたゆじゆつせられけれとも。弁慶にかちせられ。力及はぬ次第(7才)

とて皆海底に沈せ給ふ。暁かたの事成に。そこもなき遠嶋に。灯の影かほの／＼みゆる。判官御覽あつて。里ちかき浦なればこそ火は見えて有らめ。あの火を便に此舟を漕よせよ。承ると申て。火を便にこきよせ見れば。八十余なる老翁の釣をたれてそゐたりける。判官御らんあつて。いかにや尉殿。此うらはいづくの国。いかなる里にてあるやらん「サシイロ」翁承り。返事に及はず。舟ほと／＼と音す。一首はかうそ。聞えける。いさり火の。もしほ(7ウ)

の煙。風に消て。吹あかしたる。荻の一村「コトハ」判官聞召れて。あら面白の哥や候。誰か此哥のこ／＼ろをしつたる人の有やらんと。御尋有けれ共。いづれも舟心地まし／＼てしつたると申かたもなし。十二人の思ひ人の中に。いそのせんじが娘。しつか御せんす／＼み出。あらうれしやさふらふ。今ははや此舟。しんらはくさい。震丹とやらん

へも。落されて有哉覽と。心もとなくおもひさふらへは。なふ今は安堵にてさふらふ。「カ、ルモンタイ」されは萩にあまたの異名あり  
 〱よしとも申あしともいふ (8才)

〱村と云は里の名 〱其上古き哥にも 〱いさり火といふ事は 〱難波入江に 〱よせ 「フシ同」られたりいか様。此浦は津の国のあしやのうらの。事やらんなふ我が君と。申けり 「コトハ」判官聞召れて。某もさ存る。いかにや尉殿。此浦は津の国蘆屋の浦か。さん候。さてぜう殿は此うらの人か。いや是は。住よし方の者なりとて「カ、ルモンタイ」けすかことくに失させ給ふ 〱扱はうたかふ所なし。たつみの明神の。義経をあはれみて 〱をしへ給へる。たつとさよと 「フシ同」うしほで (8ウ)

手水。うかひしてそな。たを礼し給ひけり 「コトハ」去間御さ舟を蘆屋のうらにおしよする。彼うらの国民。蘆屋の三郎光重。舟子にあふてとふたりけり。舟子こたへて申様。さん候此君は。鎌倉殿の御舎弟に。太輔の判官義経。西国下向ましますか。悪風に吹れ。此うらへよらせ給ひて候。光重聞て。されはこそ此君は。鎌倉殿と。御中たかはせ給ふ人よ。いざ此君を打とつて。関東へまいらせ。くんかうけじやうにあつからん。人々やつといふまゝに (9才)

うら内を触る。我もおほしき浦の人。二三百人まつくろによるひ。御座舟を二重三重におつとりまいてときをどつとあぐる。あらいたはしや御さふねには。いづれも舟心地まし〱て。さなから前後をわきまへさせ給はず。其中に弁慶一人。いまたふねに酔さりけり。本より

用心きびしくし。物のぐ小具足さしかため。卅六さいたる。大中黒のそやおふて。五人ばりのまん中にぎり。舟屋かたにつつ立あかつて大音あげて呼はる。たゝ今 (9ウ)

爰元にすゝみ出たる兵者をいかなる者にて侍るそ。是は。鎌倉殿の御舎弟に。大夫の判官よし経。西国下向ましますか。悪風に吹れ。此浦へよらせ給ひて候に。御触状こそなくとも。御けいごには参らすして。なんそや今の狼藉。手なみの程をみせんとて。さし取引つめ。散々にいたりけり。表にすゝむ兵者を 「ツメ同」十七八騎はらりといられすこし矢比を引しりそく。光重是を見るよりも。御さ舟に今は矢種そ尽ぬらん。かへせもとせ人々 (10才)

と。御さ舟まちかく切てかゝる。弁慶か是をみて。弓矢をからりとなげ捨。長刀ひんぬいて。舟より下にとんでおり。光重と渡りあひ。おふつかへしつ。散々に戦たり。去間光重。弁慶かうつ長刀。請はつし候らひて。光重か甲のまつかうを。ふたつにはつかと切われ。うしろはしころほろ付。まへははつぶりよたれかね。四枚かなとうひつしき草摺ふたつにさつと打わられて弓手めてへさばけたり。これこそ軍の手はしめ大勢の中へわつて入。西東 (10ウ)

。北南くもてかくなわ十文字やつはながたと云ものに。散々にきつたりけり。手本にすゝむつわものを。五十三騎切ふせ。大せいに手をおふせ東西へばつとおつちらかし。軍の門出めてたしとて。御さ舟に取乗。住よしの浦にあからるゝ。末繁昌と聞えけり (11才)

## 【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(毛1) 毛利家如滴本、(毛2) 毛利家片仮名本、(内) 内閣文庫本、(打) 打波家本、(京) 京都大学蔵一本

- 1オ ○むねとの兵者―(毛1・毛2・内) むねとの人々を ○そもなき―(他本) そこともなき
- 1ウ ○とまり給へ―(毛1・毛2・内・打) とまり給へとよ
- 2ウ ○これより―(京) ナシ ○ゆめく叶ひ候まし―(京) おもひもよらす
- 3オ ○ことくぐ―(京) ナシ ○今一度―(京) ナシ ○さあらは―(京) げにくははいわれたりさらば
- 3ウ ○水主―(京) ナシ ○中々―(京) さうなく ○わたせとの御誕なり―(毛1・毛2・内・打) わたせとそ仰ける ○さいて押渡す―(毛1・毛2・京) さしてそ渡しける
- 4オ ○某もさ存し―(打) 「あふさる事あり」ヲミセケチニシ、「それかしもさ存る」ト傍書。
- 4ウ ○それにも叶はぬ物ならは―(京) なをしも風がふき硬ば
- 5オ ○ひれふして―(打) えひふして
- 6オ ○舟底に―(毛1・毛2) 所詮引導せはやおもひ舟底に、(京) 引導せはやおもひ舟底に
- 6ウ ○呼はる―(毛1) なる、(毛2・内・打) 名乗やう

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

7ウ ○そこともなき遠嶋に灯の影か―(毛1) そこともなく灯か、(毛2・内・京) そこともなき遠嶋に灯が ○里ちかき浦―(打) 人すむ浦 ○音す―(他本) 音つれて

8オ ○ましく―(毛1) ましく―(毛2) ましく―(毛1) ましく―(京) ましく―(毛2) ましく―(他本) さふらひつるに

8ウ ○いや是は―(他本) いや

9オ ○此君は―(他本) これは

9ウ ○我もおほしき浦の人―(京) うらの人々 ○まつくろによろひ―(京) さしあつまつて ○いづれも舟心地まし―(毛1・毛2・内・京) ナシ

## 【常繁問答】

去間ときわごせんは程なく清盛になびき給ふ。老木の花のなからへて春にあへることく也。子共の見るもはつかしや。妻のかたきになびくこそためしすくなき次第なれ。心つよくてさてはてば。我が身の事はさて置ぬ。母や子共の行ふまで。よもすなをにはあらし物と思ひの外にそなびかれける。扱こそ清盛引かへて。浅からすちきりたまひけり。常繁心におほしめす。今こそか様に有共。替ならひの有ならは。又うき目にもあひぬへき。末まで子細の(12オ)

なからんは出家の形にしかしとて。嫡子にあたる今若とを園城寺へこそあけられけれ。次乙若はだいこの寺 「カ、ルフシ」 牛若殿はお

さなくて 「同」 いたまめのとに。 いだかれて。 あかしくらすと。 せし程に七歳にならせ。 給ひけり。 ときわ心におほしめす。 あの丑若と申は。 兄弟か。 中のみめよしなり。 大所へ上せ置ならば。 人の口もおそろし。 都ほとりに引こもれる古所を尋て。 上すへし。 いつくにかは有なんと。 仰出されたりければ。 有人申けるやうは。 鞍馬寺と申は。 弓削の女院の (12ウ)

御墓堂。 本尊は大悲多門天。 福智恵ともに満足せり。 うし若殿の。 御為により。 なんとそ。 申ける 「コトハ」 常繁聞し召れて。 其儀ならはくらまへ上り。 余所なから拝み申。 さも有なんと思ひなは。 別当に契約し。 うし若を上げはやおほしめし。 賀茂の社参にことよせ。 かりそめふりの御出なれば。 網代の輿の下簾さあらぬ躰にかけさせ。 御供の人々には。 ねうぼうたち一二人。 はしたの女二三人。 りきしや計をお供にて 「カ、ルフシ」 河原を上りに参らるゝ 「同」 かものみやしる (13オ)

伏拝み。 七曲八町坂くらまに。 着給ひけり。 地しゆ権現ふしおかみ礼堂に参らせ給ひつゝ。 隔子の。 内へお入あり礼盤にむかひらいしつゝ。 高座にむすとあかりて。 かうろとりあげ。 けいならししはらくねんしゆ。 し給へり 「ツメ同」 かゝつし所に。 鞍馬寺の別当。 洞幸の阿闍利。 日中のつとめの其為に。 礼堂に参り。 隔子の内を見給へは。 ゆふなる女着座してはやねんじゆなかばと見えにけり。 洞幸御覽して。 やわか女の身として。 大法さへはあかるへき。 他山の児の偽 (13ウ) 寺をわらはん其為に。 高座の上のねんじゆかや。 さありとても一

且。 とがめはやと思召し。 いかれる面をふり上。 さもあらすとよた。 今。 高座へあかる人を。 児かと思見ればさはなくて。 はかいむぎんの女也同し人間と云ながら。 女人はさはり多くして。 清き霊地をふむ事なし。 ましてや持戒持律の。 高僧貴僧ならては。 内陣のこうしへ。 望む事はなき物を。 其うへふじやうけだへなき。 男子の身たにもそのまぬに。 かゝるいはれをしりつゝ。 寺をあなづりのほれるか (14オ)

又もとよりぐちの女にて。 まよへるまゝにのほれるか。 是非に付てひかことぞもつたいなしや女房よはや出よとそいかられる 「コトハ」 ときわ聞し召れて。 こなたの御事さふらふか。 本よりぐちの女にて。 しらで参りてさふらふそ。 をしへてたはせ給へやお聖とこそ仰けれ。

洞幸聞召れて。 実も知らず (へは) をしゆへし。 心しつかに聴聞せよ 「サシクトキ」 釈迦仏と申は浄飯王の御子なり。 悉達太子と申せしか。 十九にて出家をとげ。 檀徳山にとちこもり。 なつみ水汲 (14ウ)

爪木こり。 六年給仕し給ひて。 しんくをとげさせ給ひ 「フシ同」 廿五にて。 僧になりくとんと申奉る。 又六年はぢやうぎにて。 まとろむ隙もまします。 十二ねんをへ給ひて。 菩提樹のもとにて。 仏とならせ。 給ひて御名をは釈迦と申なり。 卅の御としより。 花嚴経を説給ふ。 三七日の。 間なり七所。 八会に。 是をとく 「ツメ同」 阿含経と申は。 十二年の間なり。 はらない国鹿野園にて。 此法を説給ふ。 惣いちあごんちやうあごん。 さうあごんちやうあごん。 此四阿含の (15オ)

中にも。 女を殊にいましめり。 般若経と申は卅年にとき給ふ。 新きほんには。 一万六百卷。 二百六十余品なり。 紙の数を申に。 一万六百卅

八。文字の数は六十億。四十万字にしるされり。此経の中にも。女高座へあかれといふ。やうもんさらになきそとよもつたいなしや女房よはや出よとそいかられる。「コトハ」ときわ聞き召れて。実々いはれのさふらひけるや。若又此経の中に。女をほめたる経文の有ならば。此高座をは出ましい。おひぢり(15ウ)

負させ給は。御身一人にかきらす法師の僧の不覺たるべし。わらは負侍らは。女のなをり成へし。かまへて負させ給ふなよ。随分は此女も一言つかひ申へし。経文を引ての給は。わらは成共おとるまし。先そまことうじ経にとく。しよさいすへし。男子をうんで種をつぐ。汝此法行ぜは。まさにけだつをうへし。「クトキ」若善業と悪果の法。

此詞を論せは。有智無智説利婆羅門。「フシ同」毘沙修陀等に。至る迄差別も更に。有ましい。「コトハ」経の説をの給は。一さい(16才)

経の惣一。法華経をもつて本とせり。彼法花経と申は醍醐味の経也。卷数は八卷。文字数を申に。六万九千三百。八十余字につもれり。彼経の始に。妙法蓮花経とよむ。其第一の筆立に女といへる文字をかく。「クトキ」へんには女。作りには。「フシ同」おさないと。かいてこそ妙と。は是をよまれたれ。妙とかける文字のよみ。数多しとは。申せ共先たえなりとよまれたり。六万九千三百。八十余字の文々は。別の事をはほめずして。妙をほめんか為なり。妙と(16ウ)

かける心は。詞にも。のべかたし筆にもいかて。尽すへき。言語道断なる間。心形消滅なりとかや。爰をもつて安するに。万法の。いた

きは女をもつて。究たり。「ツメ同」かの法花経と申は。釈迦仏の御歳。七十三と申。二月上の八日に。とき初給ひて。八ヶ年の間也。靈仙への十品は。序品方便品。辟言品信解品。藥草喻品授記品。化城喻品五百品。人記品法師品。虚空への十一品は。宝塔品提婆品。勸持品安樂行品。涌出品寿量品。分別功德(17才)

品。隨喜功德品。法師功德品。じやうふきやうぼさつほん。神力品是なり。又靈仙へかへつて。七品説せ給ひけり。囑累品。藥王品。妙音品。普門品陀羅尼品嚴王品。普賢品是なり。惣して廿八品なり。其外の諸経五千余卷の中にも。女高座へあかるなど。いましめ給ふ文もなしおほつかなし別当の扱心の内こそゆかしけれ。「コトハ」洞幸聞しめし。大きに肝をつぶさせ給ひ。此問答に負なは。且は寺のなをり成へし。叶はぬまでも今一言つがははよと思召し。面白し(17ウ)

女房。いで其いわれかたらん。ある経の文に。所有三千界。男子諸煩惱。我子唯一人。女人いごつしやうと説れたり。此文の心は。三千界のあらゆる男子の。もろくの煩惱を合あつめもつて。女人一人の業鐘とす。去は地獄は外になし。女にかぎる所なり。「クトキ」女人一人生るれば。ぢごくの使きたりとて。三世諸仏は舌をまき。おちさせ給ふとこそきけ。「フシ同」遠くかんかを。尋るに。天台山の高山へ。女の参る事はなし。医王山まれい山。靈鷲仙にいたるまで。女をゆるし給はず。まちかき(18才)

秋津嶋にも。延暦寺高野山はせ岡寺や当麻寺。多武の嶺に至るまで。内陣のこうしへ。望む。事のあらされは。はるかにおかみ。奉る戒行

の程の。つたなさまよ 「コトハ」女と生れける事も。正法秘法なる間。ぐちのやみ深くしてしつとの思ひ浅からず。邪念のつくる事もなし。もつたひなしや女房。御堂のけかれ候にはや／＼御出候らへ。猶も御出なきならは。下僧共に申付出すへしとそ怒られける。ときわ聞召れて。いかにや洞幸。物をしらすは無言あれ。貴き人のけし(18ウ)からず。女をそしり給ふ事にくむにはあらず。必輪廻の業をはなれんか為なり。まよひの前に男女有。さとりまへに男女なし。善悪二つなき故に邪正も更にへたてなし。是はふかき心にて申ともしろし召るましい。先耳ぢかに申へし。仏も母かましませはこそ。まよの為に始めて報恩経を説ひ。切利天にあかり。一夏の間法を説。母の為にほうぜらるゝ。仏も昔は凡夫にて。太子とおはせし其時は三人の后おはします 「クトキ」一をはやしゆたら女。二の后をは(19オ)

いぎとて。さふなく人にみせられす 「フシ同」第三に。くだみとて殊に容顔びれいななり。此三人の御中に。御子あまたおはします。やしゆたらによいと申は。釈迦仏のみに。寿童菩薩とおはせし時。くいによといへる女に。五本の蓮花をうへて後。ねんどうぶつとくやうぜし。其約。束のくちぢして。今やしゆたらと。生れて太子に契り。籠給ふ。太唐のいわうざん。靈鷲仙に至るまで。女をそしり給ふ共。兩戒の。ほうをはやはかはそしり給ふへき。たいこんりやうぶ。かけてのち(19ウ)

ぢやうゑの二法。たちがたし 「ツメ同」さ申洞幸も。母の腹にやとつて。ぐち田満をくそくせり。最初かららんしやう。ないしはらじや

に至る迄。父母ともにあたへし。女をそしる法師は。母の恩をそむけり。父母の恩をしらざるは只畜類の(に)たとへたり。かみをそり衣を墨に染たれと。ぐちなるものを俗と云。上の形はかはらね共。心に発心有人を。法師と是を名付たり。洞幸のことくに。経の文をしるへにて。心に発心なき人を。教者と是を名付て。木にかゝる藤の。空へあかるか如くにて。をのが力で(20オ)

さらになし。ぐち亡念を先として。徒事を本とする人の心のはかなさまよ。さもあれ此寺は。いつれのみかどの御時に。いかなる人の御願にて。立られけると問給ふ。洞幸聞し召し。我か寺と申は孝徳。天王の御代の時。勸進の聖は。もとはなら法師。勸城坊と申せしか。南都を出て天台山。北谷に住給ふ。正僧都と申て。うけんちとくの聖也。かの僧都のすゝめによつて大樂大師の御建立弓削の女院の御墓堂。本尊は大悲多門天。福智恵ともに満足せり。ときわ(20ウ)

聞し召し。あふよの事をは扱置ぬ。此問答に勝ぬるそ。それをいかにと申に。女を入ぬ寺ならば。女院のみはかを。など。是には立をかれけん。其上大悲多門天。女をそしり給はず。しんの御弟子御妹吉浄天女御前とて。左の脇にざし給ふ実と女をそしり。出さるへきに定まらば。女院のみはかと。吉浄天女もるともに御寺を出しおはしませ。自も御供して。別にてらをむすんで。あんじせんはいかにや。別当こそ仰けれ(21オ)

## 【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(内)内閣文庫本、(打)打波家本、(松)松村本、(京)京都大学蔵一本、(慶)慶応大学蔵伝小八郎本

12オ ○常繁心におほしめすー(内・打・松・京・慶)三人の若たちにもよくくあたり申せとて乳母をそへさせ給ふ母の尼公もいたはりていつきかしつきたてまつる(「乳母」打・松・京・慶ハ「あまたの乳母」)

12ウ ○みめよしなりー(京・慶)くせもの也

13オ ○よかりなんー(京・慶)然るへし ○別当に契約しー(内)

ナシ

14ウ ○又もとよりぐちの女にてまよへるまゝにのほれるかー(松ハ

傍書) ○こなたの御事さふらふかー(松・京・慶)ナシ ○をし

へてたはせ給へやお聖とこそ仰けれー(京・慶)をしへてたべと仰

ける ○とちこもりー(京・慶)とち籠りあし仙人を師と頼み

15ウ ○いはれー(京・慶)子細 ○おひちり負させ給は、御身一人

にかきらす法師の僧の不覚たるべしわらは負侍らは、女のなをり成

へしー(京・慶)わらはまけさふらは、女のふかくたるへし聖まけ

させ給は、法師の惣の不覚たるへし

16オ ○不覚たるべしー(内・打)なをりたるへし ○女のなをり成

へしー(内・打・松)女のふかくたるへし ○経文を引てー(京・

慶)経のせつを ○汝此法行ぜはまさにけだつをうへしー(慶)ナ

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

シ

17ウ ○洞幸聞しめしー(他本)とうかう ○叶はぬまでも今一言ー

(京・慶)ナシ

18オ ○靈鷲山ー(京・慶)清涼山

18ウ ○御堂のけかれ候にはやく御出候らへー(京・慶)とうして

おいでまします ○下僧共にー(京・慶)おうそれなから下僧とも

に

19オ ○しろし召るましいー(京・慶)及ふへからす ○先耳ぢかに

申へしー(打)先耳ぢかに申へしひしりやうの故也(「ひ」「や」「ヲ

ミセケチ)

19ウ ○靈鷲山ー(京・慶)清涼山

20ウ ○孝徳天王ー(京・慶)光極天皇

### (烏帽子折)

抑比は安元元年三月中旬に。源の丑若とのくらまの寺を御出あり。けふ悦にあふみなる野路の宿にて。吉次信高に行合せ給ふ。其日のとまりは鏡の宿。吉次かやとは菊やと聞ふる。かゞみのしゆくの遊君ざつしやうかまへ。吉次殿をもてなす。さる間吉次。順の盃くだし。逆のさかつきをとばせければ其後はさかもりになる。「サシクトキ」あらいたはしや丑若殿は。人目をつゝませ給ふ聞きり戸のわきにすくくと。只一人たゝ住給ふ。「コトハ」爰に平家(1オ)

の侍太將監物太郎よりかた。悪七兵衛かけきよ飛驒の三郎左衛門。は

や馬にのつて。はんばの宿を触て通りけるは。此路次を十六七の少人の。通らせ給ふ事のあらは。都へ御供申上りたらんするともがらに。上下をえらますくんこう有へしとふれて其日に都へ通る。丑若殿聞しめし此儀にてあるくは。何しに鞍馬をは出けるそや。それ八しやうのわうちひろしと申せとも。としにもたらぬ丑若か。身のをき所のなきこそ。何よりもつて口おし(1ウ)

けれ。あふ思ひ出たりたゝ今は。児とこそふれて候らへ。男とふれてもあらはこそ。所詮男になりて下らはやとおほしめし。下女を近付。なふ此辺にえぼし折ばし候か。下女承り。やあ今日都よりつかせ給ふ人の。是にてえほしを御尋さふらふや。去ながら御所望にてさぶらは。あのむかひに見えたる高もがりの内こそ。烏帽子の上手にてさぶらへ。丑若なゝめにおほしめし。もがりの内に尋入てあん内申さふ。うちよりもたそとこたふる。くるしうも候らはず(2オ)

。吉次信高の。供して下るくわじやにて候か。えぼしの所望に参りて候。其時烏帽子折丑若殿をしやうじ申。くわじや殿のめされうするえほしは。大さびざふか小さびざふか。しんせいやうたうせひやう。いかやうなるをめされうそ。御このみ候らへ。頓ておつて参らせう。丑若殿聞しめしえほしはたゝ黒ければ。くろしと計心得つるに。あまたの名の有ける事よ。何とがなおらせうな。あふ思ひ出したりわれらかせんぞは。左折を召るゝと。承り及ひて候らへは。人(2ウ)

数ならぬ丑若も。左へおらせてきばやとおほしめし。なふいかに大夫殿。此くわじやかきうずるえぼしは。それなる大さびの。つぶのちつ

とあらゝかなるを。一くせみくせませ。ひなかたにあひをあらせ。くしがたをいがゝと。一ためためて左へ折てたひ候らへ。其時烏帽子折もつての外に腹を立。えゝされはあのやうなる下らうにものをこのますれば。我か身のくわかひのほとをも知らず。事も忝や。左折をめされうする人は。一とせ尾張の国。野間の内海にて失給ひし(3オ)

左馬の頭義朝。其御子にて御座ありしちやくし悪源太義平。次男朝長三男頼朝。四郎はあのゝ御ざうし。五郎は遠江のかばの御ざうしのりより。六はだいごの寺のきやうの君。七はおんじやうじのあくせんじのきみ。八男にあたらせ給ふ。当時くらま寺に御座ある。うし若殿様こそめされうずるに。わたのばらがやうなる「カ、ル、フ、シ」三がひるらうの。吉次が供をするくわじやか「同」左折をきうする事思ひもよらぬ所望かな。丑若おかしくおほしめし。仰は左にて(3ウ)

候らへと。奥へ罷下らふすせきゝとまりゝにて。左折をきたるよと。人のとかめのあらんとき。都の宿に。古きえほしの有つるを。所望してきてさぶが。左折りも右折も。此冠者は。知らぬなりかかる。六かしき烏帽子を。関屋に預け申といふて。打捨て通るならば御身のなんも。あるましきわつはか科も。のがるへき「コトハ」烏帽子折承り。いかさま是はやうある人の詞づかひぞとおもひ。あふ一たんは申迄といふて。御このみのことく折すまして参ら(4オ)

する。丑若殿はえほし取まはし御らんあつて。よいゑほしにて候か。ひとつのなんか候。たゆふきいて。やあ。地になんがさぶか。さびにくせがさぶか。ひながたくしがたこゆい所いつくになんが候そ。丑若

殿聞しめしいつくになんも候らはぬが。烏帽子をは我が所望のことく  
おらせ参らせて。かはりをもちあはざるかひとつのなんで候。たゆふ  
きいて。あらこと／＼のくわじやとのが申事や。あの吉次殿は。一  
年に一度。二ねんに二たひの。おり上りをする其供して下るくわじや  
(4ウ)

とのなれは。心やすく思はれよ。くわじや殿かおくはなむけにとらせ  
うぞよ。丑若との聞しめし。世にあり顔なるとらせ詞かな。うし若か  
よに出るならば。家のきづとも成へきことばなり。太刀をとらせてゆ  
かふすが。それは千五百里の道の用心もかくる。刀をとらせてゆかは  
やとおほしめし。源氏重代のこんねんだうと申御腰の物を。取出させ  
給ひ。なふたゆふ殿。此刀をは。えほしのかはりとなおほしめしそ。  
烏帽子のかはりには。明年の夏の比。奥よりもよき(5才)

馬を用意し申さふ。暇申て太夫殿とて宿に帰らせ給ふ。其後えほし折  
女房を近付。此とし月かゝるげさいを仕り。しんめうをたすかるを。  
仏神三宝も。ふびんとおほしめさるゝによつて。此刀を給はる。見給  
へ是は皆こかね。都の町にてこきやくして。一期の内をらく／＼と。  
すぎうする事のうれしむはいかに。「クトキ」女房聞て何と物をはい  
はすして。太夫かもちたる刀をたゝ一目見て。頓てさめ／＼となく  
「コトハ」太夫大きに腹を立。ふしきの女房のふせひや。おの(5  
ウ)

この宝まふけてよろこは。ともによるこばずしてわごぜはさて何を  
歎そ。「クトキ」女房聞て今は何をかつゝみさふらふへき。扱は只今

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

えほしおらせ給ひたるくわじや殿は。自が為には三代さうおんの主君  
にて御座さぶらひけるや。それをいかにと申に。御身のもたせ給ひた  
る刀は。源氏御重代のこんねんだうと申刀。自を如何成ものとおほ  
しめすぞ。是は一とせ尾張の国。野間の内海にて失給ひし義朝の御内。  
鎌田の為には。いもうとなりきみに(6才)

はなれ参らせ。身の置所のなきまゝに。御身に契りをこめことしは九  
年になりさぶらふ。九年の情に其刀を。自にたべかしなふ。「フシ  
同」我が君の奥州へと。はる／＼お下り。ましますにおくはな。むけ  
に。参らせん。「コトハ」太夫聞てともに涙をなかし。中々の事かな。  
夫婦かいらうとうけつの。わりなきいもせの中なれは。何をさしてか  
おしむへきとやかてねうはうにとらす。女房なゝめに悦ひ。へいじ  
一ぐ口つゝませ。こゆい取そへ。吉次か宿へ打こし。丑若ごに相奉り  
(6ウ)

。なふ我が君自を如何成ものとおほしめす(そ)。是は一とせ君の  
御供申。のまのうつみにて失たりし鎌田か為にはいもうとなり。「ク  
トキ」男子の身にてもさぶらは。御最後の御供をこそ申へきに。縦  
女にてさぶらふとも。いかならんずる瀕瀕にも。沈みはつへきこそ順  
しにてはさぶらへ(共)。捨かたきは命。つれなく命なからへ。面目  
なくはさぶらへ共。烏帽子折に契りをこめ。ことしは九年になりさぶ  
らふ。九年の情に此刀を。たゆふに所望し。我が君の奥州へと。「フ  
シ同」遙々おきたり(7才)

ましますを。一目おかみ。申さん為に是迄参りて。さぶらふぞ。「コ

トハ」それ烏帽子をきるには。こゆひをゆふてきる事さふらふ。御えほしを給はれ。小結をゆふて参らせんと。はしげたやうに雲井にさつとゆい上。あらめてたや。此えほしを召れて。奥へお下りまし〜て。秀平佐藤を頼ませ給ひ。数万騎をいんぞつし。平家の人々を。御心のまゝにほろほさせ給ひ。今一度日本を。御代になさせ給へ。暇申て我かきみとて女房宿に帰る。丑若心におほしめす。ものへのかと(7ウ)

出に。先祖の郎等に行相つる事よ。それえほしをきるには。二人の親をとるならひのあると申か。うし若は誰をえほし親にとらふず。あふ思ひ出したり我等が先祖は。七歳の御とし八幡へお参りあり。八幡太郎義家と。名のらせ給ふ其ことく。丑若も。かた親には氏神八幡を取申さふす。かた親には此年とし月住なれし。鞍馬の大悲多門の取申さふす。太刀は多門の劔。刀は八幡と心かけ。なひの柱に立よせ。九つのもとゆひを自召れ。烏帽子ため(8オ)

付て召れ。へいじの酒をみつからうつし。太刀のまへにも三々九度。刀の前にも三々九度手向。其後御身も御めしあつて。さもあれ今宵の客人か。名をは何と申そ。「イロ」けみやうは源九郎じつみやうは「クトキ」義経と申なりと独りごとをしたまひて。しきの祝を蒙させ給ふ。あらいたはしや此きみの。御代か御代にての御元服ましまさは。天か下の諸侍。参り奉公申へきに。とき世に住ならひとて。呼もこたふるも。「フシ同」唯一人の御元服。めてたきが(8ウ)。中にも先たつものは。泪なり。「コトハ」天明ければかゝみの宿の

遊君共か申けるは。さもあれ今度吉次殿か。初てつれて下るしよくわんのみめのいつくしきよ。但ふつきやうにさうぞ。夜ととも太郎の八郎の。多門の八まんの。あれ御めし候らへ是御めしあれと。独りごとをしつるおかしさよと申て取々にこそ笑ひけれ。丑若とのほえほしため付て召れ。吉次か前に畏ておはします。吉次是をみて。やあ冠者殿は烏帽子をめて候そや。それえほしをきるには。二人の親をとる(9オ)

ならひのありと申か。御身は誰をえほし親に召れて候そ。さん候余りに人々の。烏帽子召れつれたるか浦山しく候て。心ならずにえほしをはきて候か。おほせのことく未名をはつかず候。とてもはや天とも地とも父母とも。万事頼申上。如何様にも名を付て召つかはれ候らへ。吉次聞て。あふ此上は力及はず。けふよりして御身か名をは。京藤太と付ふぞやう。畏て候。但。御身がやうになまめいたるわかい人を。かちにて路次をつれんずる事が大事なれば。今日よりして(9ウ)吉次が太刀をかついておくへ下り候らへ。それいなと思はれば。是より都へ上られ候らへ。「サシイロ」丑若殿聞しめ是をたとへに申かや。世は末世に及ぶといへど。日月は未地に落ず。天上のからにしき。くだつて。でんじやにまじはる事なし。「コトハ」何として源氏のちやく〜か。浮よをわたる吉次か太刀をはもたふぞ。「クトキ」あらはかなの心かな吉次が太刀をもたばこそ。冥途にまします父義朝の御はかせを。持にこそとおほしめし。ひげ切の御はかせをわつそくにかけ。吉次か太刀を(10オ)

かついておくへ「フシ同」下らせ給ひけり。涙の雨は。玉かつら昔はかけて。見ぬものを「コトハ」去間吉次やうく下る程に。美濃の国大幕の長者の館につく。かの長者の中のでいには。大名高家の人たにもとまり給はぬに吉次がとまるいはれ。義朝の御為に。一間四面に光り堂を立られし時。かね五拾両馬十疋。勸進に参たる。情のふかきものなれはとており上りの度はとまり候。あふはかの遊君さつしやうかまへ吉次殿をもてなす。去間吉次。よに有顔なる風情（10ウ）

にて。京藤太はなきか。こなたへまいつて上臈の御まへにて御酌申せ。丑若殿はいつしやくとりならひたる事御座なけれ共。とき世に随ふ習ひとて。おつとこたへて召れけるに。まこと取ならはさる事なれば。ちやうしの酒を。弓手馬手へさつくとこほし給ふ。吉次是を見て。大の眼にかとをたて。えゝ不覚の者かな御前の酌を。左様に給はるかきつくわいなり罷たてとしかる。あらいたはしや丑若殿。時ならぬ顔に紅葉をさつとちらし。さん候我西国（11オ）

方のしよ山寺にて。衆徒の御供申。しきみつゝじあかの水。左様の奉公をこそ申ならつて候らへ。武士のおまへの御酌は。是か初にて候らへは。よきやうに御をしへ召つかはれ候らへ。吉次聞て。何と申そ。さやうの事をも私にてこそ申せ。是は人の御座敷ぞ。たゝ罷たてと申いたはしや丑若との。しほくとしてさしきを立せ給ふ。爰にはままとりのつほね。ちやうへまいつて申けるは。なふ君聞し召れさふらへ。今参りの京藤太とやらんかふきげに（11ウ）

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

さふらふぞ。世に有顔に笛をさいてさふらふそや。ちやうこのよしを聞しめし。わごせは東海道のなをりを申ものかな。さるたとへの有そとよ。芸はぬしをさげず。でいのはちす。しるをじんりんと云。しらざるをは鬼畜にたとへたり。いかに吉次かつれたる「カ、ルツメ」京藤太と申とも「同」ふけばこそ。笛をはさすらめ調子。ひとつ所望せよ「コトハ」承りさふらふとて。うし若殿のそはにゆき。君のちやうよりの御所望にてさふらふに。御身のさゝせ給ひたる。其笛一手あそ（12オ）

ばせ。丑若殿聞しめし。何此冠者にふゑふけと候や。大和竹にめをあけたる。草苅笛にて候か。赤妻の旅の徒然さに。さしはさして候らへ共。ふくまての事は思ひもよらす候。吉次聞て。何と申そ。かみさまよりの。御所望は。汝か為には。生害の思出にてはなきか。木こり笛にてもあれ。又は草苅笛にても候らへかしなと調子ひとつふかぬぞ。丑若おかしくおほしめし。あふ是は一たんのれいぎ。さらは一手ふいて。思出に聞せはやとおほしめし（12ウ）

「カ、ルツメ」母の常繁の淀の津の。弥陀次郎か本よりも。買とらせ給ひたる「同」弘法大師の蟬おれなれば。いつくしゝとも中々にあふ申はかりはなかりけり。此笛を取出し。かんこ上さく。中六下九とて。八つの哥口に。花の露をしめし。とうばんしきに音をとつて。雲井にさつとふきあけ。万事をしつめてあそはしたり。ちやう此よしを聞しめし。おもしろの笛の音や。唐橋の中将殿は日本一のおふふき。富士一見の為に。おくへお下りましゝか。此宿におつきあり（13

才)

。夜ともふゑをあそはせし。をんぜいきさし程拍子物あひすんたる所は。から橋殿の笛には。三きはまさりて覚えたり。是程の笛にて。さためてがくはふくらん。がく一手あそはせ。源きこしめし。とても調子をふく上。ふかはやおほしめし一こつでうに音をかへじゆつこんらくをあそばされ。頓て押かへしくわいばいらくをあそばすちやう此よしを聞しめし。面白の笛の音やあら面白のがくのなや。廻盃楽と云がくは。さかつきをめくらすたのしみ(13ウ)

。下戸も上戸もおしなへて酒をのめとの笛の音や。然るへくはあす計。吉次殿かとまれかしいや京藤太にふゑふかせくわげんしてあそばん「コトハ」あら面白の笛やさふらふ。所詮此盃ひとつ給はつて。只今のふゑのとのへ思ひさし申さふ。吉次きて。いかに兄弟内の者も。

近ふよつて物をきけ。そもあの京藤太がふゑをふかすは何しにか。かみ様の御盃などを給はらふず。それひとつ給はつて。現世のみやうもんにせよ。あら浦山しの京藤太やと。盃を(14才)

うらやみしは理りとこそ聞えけれ。丑若殿は三度きこしめし。御盃をかなたこなたへまはし。夜も更ければ。はまちどりのつぼね。盃をおさめてみなつほねへそ帰られける。爰に浜衛の局。ごぜ達を集て申けるは。以前ふゑふいつる京藤太とやらんは。みめもいつくしい者ふゑも上手。たしおかしき事を申つるものかな。それ笛の名には。かんちくこちくやうちく。青葉二葉。天人のひとへがくし。弘法大師の蟬おれ。我か朝のふゑ(14ウ)

には。宇治大和。嶋竹より竹なんとこそ申せ。まだこそきかね草茹ふゑとは。所詮むかしの人は。心のいたりがなふて。笛にて草をかりたればこそ。草茹笛とは申つらめ。おかしさよと申てとりへこそわらひけれ。君のちやうは物こしにてきこしめし。わごせたちは何をわらふぞ。さんさふらふ京藤太か。草かり笛と申つるそれを笑ひさぶらふ。さてわごぜは。其草茹笛のいはれをしつてわらふか知らてわらふか。百やうをしつたりとも。一やう(15才)

をしらすはあらそふ事なかれと。申たとへのあるそとよ。いでへへわごぜ達に。其草かり笛のいはれをかたつてきかせん。昔我か朝に。用明天王と申せし人は。十六にならせ給ふまで後の宮もまします。有時公卿殿上人あつまらせ給ひ。扇を六十六本おらせ。絵女房を画せ。国々へまはし。いかならんしづのめしづの子なりとも。此扇のゑににたる女やある。内裏へ参らせよ。一の后にいふへしと日本国をそふれられける。それ物のいつ(15ウ)

くしきをは。絵女房とこそ申せ。日本広しと申せ共。此扇の絵ににたる女は一人もなくして。あふきは皆都へそ上りける。然りとは申せ共。筑紫豊後の国。内山と云所に長者一人あり。四方に四方の蔵をたて、すめは。まんの長者と申せしを。人の申やすきまにまの殿と申す。子のなき事を悲しみ。内山の正観音に参り申子をこそし給ひけれ。きせいのにしはやありて。御ほうでんの内よりも。ほうじゆを給はると。北の御かた御(16才)

覽して。御ちやくたいの御身となり。なな月のわつらひ九の月のくる

しみ。十月はんと申に産のひぼたいらかなり。取上御らんなりければ。玉をのべたることくなる君にておはします。御夢想によそへ。玉よの姫と名付いつきかしつき奉る。かの姫十四の歳。此絵扇の下りたるに引合て見てあれば。ものいはゝあふきの絵かねたむびやうにみゆる。去間内裏へ奏聞申されたり。帝えいらんましゝて。急参らせよ。一の后にいはふへしとやかて(16ウ)

勅使下る。長者承り。縦宣旨にてもまします。只一人の姫なれば。叶ふましいと申て宣旨を背き申す。帝えいぶんましゝて。実々おしむもことはり也。其儀ならはまの殿。けしの種を日の内に壱万石。内裏へ参らせよ。それか叶はぬものならば。姫をたいりへ参らすへしと重て勅使立ければ。長者承り。たとへいかていのもなりとも。日数をふるほとならば。もとめても進すべきか。其上けしの種を。日の内に壱万石。何としてかはもとむへき(17オ)

。やあ女房。姫を内裏へ参らすへし。長者のねうばう是をきゝ。なふまの殿。いとふなさはき給ひそ。御身十八自十四の秋よりも。長者いんがうかうむつて。四方に四方の蔵をたて。内のけんぞくなにはに付。とほしき事なけれ共。かゝる物の時として。草合にもあふやと。あのいぬのすみにあたつて。かやのくらを作らせ。年々のけしの種を「カ、ルフシ」取集てをいたるか。「同」壱万石はそは知らす十萬石も有やらん。「ツメ」長者なゝめに悦ふて。さらは車(17ウ)をかされとて車の数をかざつて。日の内に壱万石。内裏へそなへ奉る。帝えいらんましゝてしよせんたゝまの殿は三国一の長者であり

「コトハ」帝えいらんましゝて。其儀ならはまの殿。しよつかうの錦をもつて。兩戒のまんだらを。幡色に七なかれ。織付て参らせよ。それか叶はぬ物ならば。姫を内裏へ参らすへしと重々勅使たつ。「サシロ」長者承りこはいかにしよつかうの錦をもつて。兩戒のまんだらは。「コトハ」仏達の浄土にて。蓮の糸をもつて。おらせ給ふ(18オ)

よし承る。人間の身として。何としてかはもとむへき。やあ女房。わうどに住居する身か。重て宣旨を背き何かせん。姫を内裏へ参らすへし。「サシクトキ」長者の女房是をきゝ。たゝ一人のひめなるを。内裏へそなへ参らせ。玉楼金殿の台の内に住ゐをせは。わか子とは思ふとも見んずる事もかたかる。へし。「コトハ」夕さは夜とともに。なごりおしみの管絃とて。よととも管絃なり。去共暁はまどろみ給ふ。かかりける処に。内山の正観音は。長者夫婦か枕かみに(18ウ)

立よらせ給ひ。いかにきくか長者。汝かむすめは自に申子也。おしむ所のふびんなるに。もろゝの仏達を集て。「カ、ルモンタイ」長者か中のでいにて。錦を織ぞ聴聞せよ。承はつて聴聞する。七夕彦星の。おるひの音は。てい。ほろゝ。「フシ同」是はさながら御法なり。幡色に七なかれ。織付て。長者殿の中の。でいに置給ふ。長者なゝめに悦ふて。急内裏へまいらせけり。みかといえいらんましゝて。所詮たゝまのとは。仏にてましますや。仏のむすめを乞かねて十善(19オ)の位を。すへるとも何かはくるしかるへき。位をおすへりましゝて。

十六の春の比。たとろ／＼と。下らせ給ひけるほとに。十八日と申には。豊後の国に。聞えたるはや。内山に着給ふ。「コトハ」去間帝は。とあるせうかに一夜の宿をかり給ふ。宿の太夫帝を見参らせ。あらいつくしの少人や。御身はいつくの人そ。是はならばぬ旅をうき雲の。泊定めぬ修行者にて候。太夫聞て。あらやう／＼しの返事や。唯直に仰候らへ。さん候是は都の者にて候。花の都の人は。何の御用にかゝる遠国へは(19ウ)

御下り候そ。奉公の望にて候。其時太夫横手をうつて。しゆふのくわじや殿か奉公望や。此太夫こそ。ちやうじやのしつしなれ。此歳になるまで子と云ものをもたず。今日よりして子になり候らへ。田地をかうさくせんずるとも。かいせんをまはさんも。それは御身かまゝさふよ。帝えいぶんまし／＼て。御覽せれ候ことく。楊柳のかせにふけたることくにて。田地をかうさくすんずるも。かいせんとやらんも思ひもよらすたゝ奉公ならば望にて候。たゆふ聞て。あふ此上は力及はず。さらは長者(20才)

へ申さんとて。長者にかくと申す。長者聞て。急ぐして参れ。承ると申て帝をぐそくし奉る長者御覽して。あらいつくしのしよくわんや。汝はいつくのものそ。都の者にて候。名をは何と云ぞ。山路と申。さんろとは山の道。人の名には初てきたいやおもしろい名や。なふいかに山路殿。此長者こそ。牛を千疋もつて候が。あれなるあめなる牛を。舎人共かはつたとにくんで。草をも水をもかはぬなり。今日よりして山路とのに預け申。草をも水をもよきに飼てたび候らへ(20ウ)

。あらいたはしや帝は。恋故りやうぢやうまし／＼て。明れは牛の口を引。千人の舎人と打つれ。後の野べに御出ある。千人のとねり共は「カゝル」荇ならひたる事なれば。てんでに鎌をひつさけ。「モンタイ」かきよせ。かきよせ。草をかる。「フシ同」いたはしや帝は。いつかりならばせ給はねは。牛に打かかり。笛打ふいてまします。馬は馬頭観音。牛は大日如来の。化身と承るか。実やさありけるか人間は。見しり申さねと。畜生なれとも色風情を。見知りたるかとおほしくて。草をもはま(21才)

ず。角をかたむけ。舌をたれ帝の。笛を聴聞する。千人の舎人共。此笛をきくよりも。山路殿かふく物の。名をは何と云やらん。横笛と申さふあふ。おもしろいそよ山路殿。草はし荇な笛をふけ。汝か牛には。草をかりてかけうそよふけよ。／＼と云程に。一度も草を荇給はず。是を持てこそ。夜更て心すめるをは。山路の草荇よるのふゑ。わかめかるは。た子の浦。若草荇は武蔵野よ。わかめわか草わかの浦。用明天王の。恋ゆへあそはず。笛をこそ草。荇笛(21ウ)

と。申なり。「コトハ」是は筑紫の物語。さても都には。帝を失ひ奉り。公卿殿上人あつまらせ給ひ。はかせを召るゝに。はかせまいつて占ひ申。こうずる八月十五日に。宇佐八幡の御前にて。御放生会と申事を取おこなはれ候らへ。さてそれはいかやうなるものにさすへきそ。筑紫豊後の国。内山と申所に長者一人あり。彼者に神事をつとめさする物ならば。帝は則還御あつて。天下はめてたく候へきよしれいもんを引て申す。さらは筑紫へ使者をたてよとて(22才)

。長者のまへに櫛をたつる。折節長者出させ給ひ。是は何と申たる事にて候そ。さん候こうずる八月十五日に。宇佐八幡の御前にて。御放生会と申事を取おこなはれ候らへ。それはさて何々の(か)入候そ。さん候しきしやうこくしやう。じんぐわん官人。八人の八乙女五人の神楽男まいり。ていとうのつゝみをうち。さつゝの鈴をふり上。けいばあけ馬みこのむら。しゝでんがくとをつて後やぶさめざふよ。長者きいて。えゝ六かしげなる事にて候。近国。隣郷を(22ウ)

尋るに。いつれも皆そろひたるか此やぶさめとやらんにはつたと事をかく。其時千人の舍人をあつめ。もし汝等か中に。やぶさめばしつて有か。舍人共承り。かみくゝにさへ御存知なきに。其上我々は。明暮牛にこそ乗ならつて候らへ。やぶさめとやらんは思ひもよらす候。長者きいて。実々それはさそ有らん。あの山路は都のものとして有か。若やぶさめをしつて。御神事つとむる物ならば。しやう八幡もしろしめせ。是非長者か簪にとらふず(23才)

。其時帝につことおわらひあつて。やぶさめとやらんは。やすさふなる事にて候。帝には。十町に馬場をやつて。二丁をはのけ馬場と名付。八所的をたてあそばすを。八的と名付て是は公卿殿上人のわざ。神のまへには。三町に馬場をやつて。三所にたてあそばすを。やぶさめと名付て。是は武士のわざにて何よりもやすさうなる事にて候。長者きいて。扱は御身はよく心得たる人や。まことにやぶさめをしつて。御神事つとむるもの(23ウ)

ならば。長者か簪にとつて。四方に四万の蔵。すたの宝をそへてえさ

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

せうぞと。かたく約束し給ふ。かくて八月十五日にも成しかは。近国隣国の大名高家。八幡の御所に。さじきをうちらちをゆい。をのく見物し給ふ。長者夫婦も。同じくさじきをうつて見物す。さる間しきしやうこくしやう。じんぐわん官人。八人の八乙女五人の神楽おのこ参り。ていたうのつゝみをうち。さつゝの鈴をふり上。けいばあげ馬みこのむら。獅子でんがくとをつて(24才)

のちはやぶさめになる。扱も帝には。色よきしやうぞくを奉り。鹿毛なる馬にかいくらをかせ。御前にひつたつる。帝なゝめにおほしめし。引よせゆらりと召れ。馬場渡しとつてかへし。「カールモンタイン」一の的ちやうとあそばし。二の的はたとあそばし。三の的にこのたび「ツメ同」ひらいてかゝらせ給ひけるに神殿俄にしんどうして。白きすいかん立烏帽子。金のしやくをお持あり。忝も八幡は。ゆるぎ出させ給ひて。しらすに畏り。いかなる御事候そ。王は十善神は(24ウ)

九善九ぜんのかみの神事を。十善の御身として。つとめさせ給へは。弥々五すいおもふなりさふ今は帝に還御あれ。還御ならぬものならば。末世の衆生をばつせうずる候。人多き其中に。長者夫婦はさじきよりこぼれ落させ給ひて。いかなる御事そ。十善の御身を。三とせか間つかひ申事共。口惜さよと申て。りうていこがれたりければ。帝えいぶんましまし。よしゝくるしかるましい。汝かむすめをこふる故に三とせは奉公有つるぞ。今は姫をまいらせよ(25才)

承ると申て。忝も。宇佐八幡の。かいしやく人にてたまよのひめ十六。

用明天王。十八と申には。帝に還御あり。玉楼金殿の台の内に住居し。えんあふひよくのかたらひ浅からすこそ聞えけれ。其後御子を。まふけさせ給ひて。聖徳太子と申。我朝に仏法を。ひろめさせ給ふなり玉よの姫は正観音。用明天王。阿弥陀如来の化身。聖徳太子。九世観音のけんげなり。用明天王。恋ゆへあそばす笛をこそ。草薙ふるとは申なれ知らぬ事をは(25ウ)

わごせたち笑はぬ事有ぞとよ。「コトハ」其後君のちやう浜衛を召れ。以前に笛ふいたる京藤太とやらんは。思へは見る所の候にこなたへくして参れ。承りさふらふとて丑若殿をぐそくし申す。去間うし若殿。座敷になをらせ給ふ。「クトキ」ちやう此由を御覧して。あらふしきのくわじやとのや。座敷になをる風情は。野間の内海にて失給ひし義朝にたかはず。御目の内はひとへに悪源太にて御座さふらふ。ものの給ふこゑの色は朝長にたかはず。若も源氏の(26才)

ゆかりにてましまさは。はや／＼名乗給へ。「コトハ」みなもと聞しめし。是は上臈にても候らはす。都三条辺にすまゐする下らうの子にて候。「クトキ」ちやう此由を聞きしめし。なふみうちは何をの給ふそ。みつからは義朝の妻女なり。まんじゆの姫と申て。忘れ形見の御座さふらふを。いらたかじの麓に出家になしをき申なり。又此あたりに一間四面に光り堂をたて。阿弥陀の三尊をあんじ申。義朝あく源太朝長父子三人のごゑいをあらはし申なり。若(26ウ)

も源氏のゆかり。「フシ同」かゝりてましまさは。せうかうなんど。あれかしなふあら。心ふかの。くわじや殿や。源聞きしめし。軒の玉水

ちり／＼草。つゝめどもつゝまれず。さてかくせ共かくされず。父よといへるこゑをき。山ぶき顔に打にほひ。今は何をかつゝむへき。義朝には八男。常繁腹には三男。鞍馬の寺に住居せし牛。若と申(者)なり。ちやう此よしを聞きしめし扱はくらまにおはせし丑若ごにて御ざありけり。若君を見申せば。死て久しく成給ふ。義朝の御姿を(27才)

。見参らせぬる心地のありてなつかしさよとの給へは。源も二歳のとし。別申せし父ごをは。夢ともさらにわきまへず。只今かやうに仰らるれば。めいどにまします父ごを。拝み申す心地のありてなつかしさよとの給ひて。御袂にすがりつき。伏しづみてぞなき給ふたかひにつきぬ。御涙余所の。袂も。ぬれぬへし。「コトハ」其後君のちやうはまちとりを召れ。あれ／＼御供申。御ゑいをおかませ申せ。承りさふらふとて。丑若殿をぐそくし申す(27ウ)

。立入御覧するに。義朝悪源太朝長父子三人のみゑいをあらはし申なり。源なゝめにおぼしめし。焼香札を参らせ。ふしぎに丑若こそ思ひたつて。吉次が太刀をかついて奥へくだり候らへ。返々も道の間の守護神となりたまへと。「サシイロ」ふかくきせいを申。ならばぬ旅の御つかれ。らいはん引よせ枕と定め。少まどろみ給ひけり。「コトハ」懸りける処に。義朝悪源太朝長父子三人の人。まつくろによろひ。うし若の枕神に立よらせ給ひ(28才)

。嬉しくもおきな心に思ひ立て。吉次が太刀をかついておくへ下るものかな。かまいて吉次吉内吉六。兄弟三人か申さん事を。我々父子三



へかし。人多き其中に。伊豆のお山のやけ下の小六。なにかし見て参らんと云まゝに。かきのすぐかけしかまのときん。まへはづかにひつかうて。大墓のきみのちやうの門外によつて。大音あげてよばはる。熊野山の山伏。仏法修行の其為に。奥松嶋へ下る(31ウ)

なり。山伏十人にあまつて候。今夜一夜のほいたうたべやつと呼はつて内のけごを閑にみて通る。やゝしはらくあつて。内よりもよねの俵をなけ出す。小六きつと見て。ものへの門出に。繩かゝたるものはいまゝしと思ひ。腰の刀をひんぬいて。かけなわはらりと切て捨。よねをすこしとり。青野か原に走りかへつて。中のざしきにとうとゐて二の息をほつとつく。長半是を見て。いかに柳下殿。小六聞て。ゑゝ物はいくらもさうしもの。八十四の皮籠を(32才)

。切戸のわきにつんたるはたからの山のことし。四十二疋の雑駄。三疋の乗馬。何れもよき馬にて候。三十余人のひやうじのもの。弓やなぐい太刀刀おつとりそへ。用心する顔には見えつれ共。かのどうづきをあつるものならば。きやつはらはえんの下へかくれうづ。馬もかわごも。やすくとらふするか爰に大事の事か候。長半聞て。今に初ぬ柳下殿の大事とは何事そ。小六聞て。いやかたらせて聞し召れよ。いにしへはつれても下らぬ。十六七の初冠か候が。此わつは(32ウ)かいしやう着てい。あらゝ語て聞せ申へし。そつと見たる所は。色白くじんじやうなるか。はだにはどんきんと云ものをひつちかへきて候。きたる直垂は。日本の絹にてはなし。唐きぬをもつて。地をは山鳩色にそら色に一はけはいて。十八五色の糸をもつて。物の上手か

縫ものをぬふて候。先弓手のひぼ付に。いがき鳥井社且をぬい。馬手のひぼ付に。たけくらべに。杉を三本縫て。源氏の氏神しら鳩か。十二のかいごをかいつれて。羽ぶしとゝをくいちがへ。ぼつ(33才)とたつてはさつとはおり。舞あそんたる。いはゐの所をはありゝとぬふて候。うしろのきくとちに。北山とのゝさんさう。住吉のすいひん。御室の御所のけいきを。ありゝと縫てさふ。扱又袴のくだりに。しぐせいぐわんをまなんで。唐土のましも千びき。日本の猿も千疋。とうどのまはは太国なれば。せいを大きく面を白くぬふてさふ。日本の猿は小国なれば。せいをちいさふおもてを赤く縫て候。日本と唐土のしほざかひ。ちくらが沖と云ところにて(33ウ)

「カ、ルモンタイ」唐土のまはは日本へこさんとする。日本のまはは唐土へこさんとする。こさうこさじの「ツメ同」がまんさうをへゝ所をはありゝと縫てさふ。扱又袴のけまはしに。岩に松鶴に亀。いせきにかゝる河柳。沖の波かとうとうつてさつと引て行。塩さかひをぬふてさふ。きたる腹巻は。毛は青黄おとしなり。よの常の腹巻は。草摺を八枚さぐるが此草摺は十二枚。十二まひの草すりに。白かねこかねをもつて。薬師の十二神を。いがゝと頭はす。さい(34才)

たる刀は。皆こかね作りなり。とつ付さや口へに。くりから不動明王。瀧つばへとんでおり劔をのふたる所を。ありゝとほつてさふ。おもての目貫は不動のたい。うらのめぬきは。くらまの大悲多門の。御神躰をあらはす。下緒には法花経の七の巻。やくわうぼんのう。み

なかくんでさふ。持たる太刀は。二尺六寸か。七寸かと覺えたり。せつはもよせ。うんどうか甲かね。まことのめぬきそら目貫。せめしば引石づきかわさきにいたるまで。上ぼんのかかねをもつ(34ウ)てひかめきたつて見えてさふ。きたるえほしは。六波羅やうの当世むきの。つぶのちつとあらゝかなるを。一くせみくせませ。ひながたにあひをあらせ。くしがたをいがくゝと。一ためためて左へおつた烏帽子なり。びんの髪はちゝんたり。まゆの毛はかつたり。昨日かけふかの山出。此わつはのあり様を物によくくゝたとふれは。木ならはしたん。鳥ならは鳳凰。かねならはしやきん。昔をとるならは。源氏の大しやう。当世やうをとるならは。清盛宗盛の御(35才)公達てましますかけいぼの中にくまれ。あつまときいて。吉次を頼ふでおくへ下ると覺えたり。此わつはか目の内を。たゝ一目見てさふが。油断する物ならは。いや三百七十余人の盗人のほそくびはたすかりかたく見えてさふ。「コトハ」長半しはらく打聞て。えゝ柳下殿の物語こそ。更にもさんせぬ事にて候らへ。其わつはか。何ともはやれかし。例の長半か。八尺五寸のぼうをもつて。ゆりひらいてたんだ一打の勝負さふよ。夜はなん時(35ウ)そ。はや八つの比になつて候。時こそよけれ人く。はやうつたてと云まゝに。てんでに車松をとぼしつれ。青野か原をうつたつて。大墓のきみのちやうの門外へのめきたつてよする。去間くま坂の太郎。どうづきをおつとつてどうくゝとあつる。源あわ。よとうとおほしめし。わさとおもてのしとみを。二三間とつて。えんよりしもへなけお

とし。上なるしとみをおろしかけ。よする盗人を。今やをそしと相待る。去間太郎。黒かわの胴丸き。かみ(36才)をばつとみだり。「カ、ルツメ」大長刀を引づつて。「同」人はないぞたゝ参れやあ参れやまいれと下知をする。源は御覽して。きやつはくせもの。きははやおほしめし。走りかゝつて。いかつち切と名を付てちやうと切て御らんすれは。むさんやな太郎。あへなく首を打落されて。くびは内へころひければ胴はそとへそたをれたる。熊坂の次郎。急走りかへりて。いかになふ長半。太郎殿こそ討れてましませ。長半此よし聞よりも。無念の次第かな(36ウ)。  
。其わつはに手なみ見せんと云まゝに。八尺五寸の。扱もぼうをは。水くるまにまはいて。源に渡りあふ。源御らんして。長半かはうをは。散々にきりおつて。手本計残されたり。三百七十余人の盗人。源を中に取籠て。火水になれとまふだりけり。源は御覽して。玉になれたる蓬萊の鳥の風情かくやらん。驚くけしきはまします。討物のつかをは。くき長にとりのべ。大ぜいの中へわつて入。さんくゝにきつてまはる。天はうずまひて地はあけにそみ(37才)かへ。竜の水を得雲を分。こくうへあかることくなり。いまたときもうつさぬまに。くつきやうのぬす人ともを。八十三人きりふせたり。ちやうはん是を見て。六尺三寸の。さても長刀を。水車にまはいて。みなもとにわたりあふ。みなもとは御らんして。おほくのかたきにわたりあひ。骨はおつたり。実はちやうはんは。あらてのむしやなり。大なぎなたで。たゝきたてられて。うけ太刀になつていやきつくゝと

引たまふ。ちやうはんこれを見て(37ウ)

。あわよいそとおもひて。すきまなくうつてかかりけり。みなもと御らんして。そうじやうかかけにて。ならひしまでも。天狗のほう出あふ所とおほしめし。きりのほうをむすんで。かたきのかたへなけかけこたかのほうをむすんで我か身にさつと打かけ。いやちやうときつて御らんすれば。むさんやなくまさか。まつかうふたつに打わられあしたの露ときえにけり。それよりもみなもと。奥へくたらせ給ひて。天下をおさめ給ひけり(38才)

## 【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(毛)毛利家本、(内)内閣文庫本、(直)直熊本、(打)打波家本、(松)松村本

1ウ ○飛驒の三郎左衛門―(毛・内・直・打)ナシ(打ハ「ひたの三郎左衛門」ト傍書)

2才 ○思ひ出たり―(毛・直)ナシ ○つかせ給ふ―(他本)くだらせ給ふ ○むかひに見えたる―(他本)向なる

2ウ ○くわじや殿の―(毛・内・直)烏帽子箱取出し冠者殿の、

(打)冠者殿様(「烏帽子箱とり出」ト傍書) ○黒ければ―(直)ナシ

4才 ○御このみのことく折すまして―(毛・内・直・打)左へ折す

まして

4ウ ○烏帽子をは我か所望のことくおらせ参らせて―(他本)我所望のことくゑほしをばおらせまいらせて ○あらことくし―(毛・内・直・打)からくと打笑ひあらことくし

5才 ○となおほしめしそ―(毛・内・直・打)とばしおほしめすな、(松)となおほしめすな(「な」ヲミセケチ、「ばし」ト傍書)

6ウ ○中々の事かな夫婦かいらうとうけつのわりなきいもせの中なれば―(毛・直・打)ナシ ○何をさしてかおしむへきと―(毛・内・直・打)何をかわごせにおしむへきと、(松)なにをかおしむへきと ○口つゝませ―(打)てう花方に口つゝませ ○打こし―(毛・内・直・打)尋行、(松)うちこえ

8才 ○自召れ―(他本)自めされ御髪おはやし有

8ウ ○とき世―(他本)浮世

9才 ○つれて下る―(内)つれたる

9ウ ○ありと申か―(毛・内・直・打)候が ○今日よりして―(毛・内・直・打)ナシ

11才 ○御前の酌を―(他本)人の御前の御酌を

11ウ ○御供申―(毛・内・直・打)御出仕の御供を申 ○何と申そ

―(毛・内・直・打)ナシ ○なふ君聞し召れさふらへ―(毛・内・直)如何に君聞しめせ、(打)ナシ、(松)なふきみきこしめせ

12才 ○でいのはちす―(他本)泥の中の蓮

14才 ○此盃ひとつ給はつて―(毛・内・直・打)自一つ吞て、

- (松) 此さかづきみづから一つたまはつて ○近ふよつて物をきけ  
 (他本) ちかふまいりて物をきけ某が都にて申せし事は是なり笛  
 はふかづともこしにさせ舞はまはずとも常に扇をもてと申せしはこ  
 れなり ○何しにか (他本) ナシ ○給はらふず (他本) 何と  
 してたまはらふぞ ○現世のみやうもんにせよ (他本) 現世のみ  
 やうもん後生のうつたえにそよ (内ノホカハ「そよ」ヲ「せよ」ト  
 スル)
- 14ウ ○以前ふふいづる (毛・内・直・打) さもあれ昼の  
 16ウ ○君 (他本) 姫 ○帝えいらんまし〜て (打) ナシ  
 17オ ○勅使下る (毛・内・直・打) 勅使をぞ下されけれ (内ノホ  
 カハ「けれ」ヲ「ける」トスル) ○叶ふましいと申て (他本)  
 おもひもよらぬ事成べしと (内ハ「成べしと」ヲ「なりとて」トス  
 ル) ○其上 (毛・内・直・打) 殊更
- 19オ ○きくか長者 (毛・内・直) 長者 ○もろ〜の仏達を集て  
 (打) ナシ
- 19ウ ○せうかに (他本) 小家に立寄せ給ひ ○少人つや (毛・  
 内) 初冠や、(内・直) しよくはん殿や
- 20オ ○奉公望や (他本) 奉公好や ○此歳になるまで子と云もの  
 をもたず (直) ナシ ○あふ此上は力及はず (毛・直) ナシ
- 20ウ ○さんろとは (毛・内・直・打) 長者聞て山路とは
- 22ウ ○近国隣郷 (毛・内・直・松) 近里近郷、(打) きんりんか  
 う

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

- 23オ ○いつれ皆 (他本) 残は皆々 ○明暮牛にこそ乗ならつて候  
 らへやぶさめとやらんは (毛) 何としてかは存ずべき ○長者き  
 いて (毛) ナシ ○若やぶさめをしつて (毛・内・直・打) 流  
 鏑馬をはしりて有かたとひいかていの者成共やぶさめをしつて、  
 (松) やぶさめをばししつてあるかもしやぶさめをしつて
- 23ウ ○其時帝につことおわらひあつて (毛) 帝斜におぼしめし  
 ○三所にたて (他本) 三所的をたて
- 24オ ○近国隣国 (毛・内・直・打) 近里近郷 ○八幡の御所に  
 (打) ナシ
- 24ウ ○しらすに畏り (打) ナシ
- 27ウ ○御袂にすがりつき (打) ナシ ○御涙余所の (他本) 其  
 涙余所の ○御供申 (他本) ぐそくし申
- 28オ ○御覽するに (毛・内・直・打) 御覽有ければげにと、  
 (松) 御らんずるにげにと ○義朝悪源太朝長父子三人の人 (毛  
 ・直) 父子三人の人、(内・打) 父子三人、(松) よしともあくげん  
 だともなが三人の人
- 28ウ ○吉次家宝 (毛・内・直・打) 吉次かかはご
- 30オ ○宵にぬつたるなまあぜを暁はしるけら次郎てんがくかくぼに  
 は友をまよはずきつね三郎同しきいたち次郎 (毛) ナシ ○吉次  
 家宝 (毛・内・直・打) 吉次がかはご
- 30ウ ○すでに其よも夜半計の事成に (毛・内・直・打) かゝりけ  
 る所に

31才 ○それも盗はもとでもいらざして―(毛・直・打) それよりも盗は、(内) 夫よりも盗はもとでもいらぬ ○日本六十六か国を―(毛・内・直・打) 日本国を ○きやつばらは―(毛・内・直・打) 何も

31ウ ○内のていを―(毛・内・直・打) 内のけこそ

32才 ○やゝしはらくあつて―(毛・内・直・打) 良遙に候て

33才 ○日本の絹にてはなし―(毛・内・直・打) ナシ

35ウ ○其わつはか―(毛・内・打) さりなから其わつばか

36才 ○青野か原をうつたつて―(毛・内・直・打) ナシ ○源あわ

―(毛・内・打) 源聞しめしあは、(直) 源こらんしてあわ

36ウ ○いかななふ長半―(毛) ナシ ○討れてましませ―(内・直

・松) 手をおふてましませちやうはんきひてやあいた手かうすでか

次郎承ていた手やらんうす手やらんくびがうせてさうばこそ

37才 ○散々にきりおつて―(他本) 一尺をひてづんどきり二尺をひ

てちやうときつて ○源を中に取籠て―(毛・内・直・打) 此由を

見るよりも源を中にとりこめて

37ウ ○うけ太刀になつて―(打) ナシ

### (正尊)

去間判官殿あくれば参内申されたり。帝えいらんましゝて。幾程なくての上落は。心もとなく思へとも帝をしゆこせんためならば。相坂よりにし三十三か国をとらすると宣言をかうむり。堀河殿にうつらせ

たまふ。かくて近国隣国の大名小名の武士とも。此由をうけ給はりくんこうけしやうにあつからんと。門外に駒のはなゆるす事こそなかりけれ。去共関東よりの御ゆるされもなき間おこなひ給ふ事も(1才)なし。今こそかやうにましますとも。終には日本半国の大将にて有へきと。みなこのきみへおもひ付申す。関東の梶原は此よしを承はり。君の御まへに参りいかに我か君きこしめせ。さても御さうしこそいまた御ゆるされもなきに。相坂より西卅三ヶ国はわがまゝなりとの給ひて。四国西国より関東へまかり下る兵者を。みやこにてことゝくおしとゝめ給ふ。今こそかやうにましますとも。終には日本は。此(1ウ)

君の御はからひたるへし。いたはしくは存づれとも。御さうしを討参らせ。御教養をは懇に。御とふらひあれと申。頼朝きこしめし実々それはさそあるらん。いそき討手をのほせよ。梶原内々打わらひおもふさまにしすましたるとおもひ。たれを討手に上すへき。爰にくき相手あり。みうちの土佐正尊は心も剛にてちゑふかし。やゝともすれば某に敵をるすものなれば。かれをうつてにのほすへし(2才)

。あんふかきものにてぎけいも討れ給ふへし。従(うたれ)給はずとも「フシ同」土佐は終には討るへしとさだにうたれてあるならば。

ぎけいもほろび給ふへし。両敵なからほろほして。うき世の中を楽々と。すまはやなんとおもひければ。案しすまして。かちはらはしやくとりなをし申ける「コトハ」いかに我か君きこしめせ。それ関東に弓矢をとつての名仁は。其数多しと申とも。御内の土佐正尊は心もか

うにて知恵ふかし。かれをうつ手(2ウ)

に御上せあれと申。頼朝聞召れて実々それはさそ有らん。此者十九の  
 としいまた金丸にてありし時。尾張の長田か館にてその数人をほろ  
 ぼし。そこにても討れずし其名をえたる名仁なれば。かれをうつ手  
 のほせよ。梶原承り御判給はつて申付んと申。頼朝御判をいたさせ給  
 ふ土佐か宿へそ着にける。土佐は御判を給はり。あら浅ましや日本か  
 寄て責るとも。やはか討れ給ふへきよし経の御(3才)

討手を土佐一人に仰付らるゝ事は。御前へ引出されてくびをきらるゝ  
 程の事。ちたひ申たけれとも。御意にもれても正尊か。命いきてもか  
 いあらし。たとひ上ると此事を。ふかくつゝめと云まゝに。むねとの  
 つわもの「カ、ル」八十三騎揃へつゝ鎌倉うちを忍び出「フシ  
 同」道にていでたちけるやうは。かまくら殿の御代官にくまのへ参る  
 と披露して。かみから下に至る迄。浄衣ひさふりたちませ。いち目笠  
 にしでつけさせ(3ウ)

。鎧入たれ長持に。おはけたてしめ引せ。引馬共の尾かみにも。ゆい  
 しできつて付させ。渡る瀬ことてこりをかき。夜を日についてうつ程  
 に鎌倉を出て。廿日には都入とぞ。聞えける「コトハ」去間正尊五  
 条油の小路に宿をとり。土佐は聞ふる名仁にて。女をかたらひ御所の  
 けごをそ見せにける。女走りかへつて申やう。いつくよりも御所様  
 には。御用心もましますさすよきおりからと申。正尊聞てさてはおりこ  
 そめてたけれ(4才)

。明々日の暮ほとに是非にをみて懸るへし。爪かゝせたる馬共のすそ

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

をひやせと云ければ。承ると申て。堀川表に引出し駒のすそを冷し  
 ける。かゝりける処に。太将の御内なる。伊勢の三郎義盛は。清水参  
 りをしけるか。ほり川表を見てあれば。飼たる馬のけよけなるをのり  
 つれてこそひやしけれ。よし盛此よし見るよりも。太将の御内にもか  
 程の馬はなし。いかさま是は東国かたの大名(4ウ)

の。上落にて有けるや。呼はやと思ひ立よりものを問けれ共つゝみて  
 更にあかさす。いかさま是はやうありげなど思ひ。舍人多き其中に。  
 口の聞たるとねりあり。かれらかあたりへ立寄。きたる笠をひんぬい  
 て。ものをとはすして。先のつたる馬をそほめにける。あつはれ御  
 馬候や。爪髪のみりやうはかまくらや候や。おつさまむかふよこはた  
 ばり「カ、ルツメ」尾口さうどうつまねのくさりしゝあひ骨なみよ  
 めのふしは作り付たか(5才)

ことくなり。あつはれ御馬候や。かほと多き御馬の中にうり馬なんと  
 や候らん。きやうかるかはりに引かへて。参らせんと云たりけり。舍  
 人此よし聞よりも。御身いかなる人やらん。そゝろに口のきゝやうは  
 あやしゝとこそとかめける。義盛きいて。ぢたひ我等かならひにて。  
 口をかかでは叶はぬなり。京と田舎を家として。馬を商買身をすくる。  
 本は丹波の国のもの。ひ原の後藤左ことで。菓飼の針づかひ。すその  
 血をも出すへし。御馬なんとや候(5ウ)

らん御ひけいあれと云たりけり。舍人このよしきくよりも。さてはく  
 るしうなき人哉。此御馬共こそ。明々日の暮程に。大事にあはん御馬  
 なり。すその血をも出すへし。宿を尋て御入あれ。お宿はいつくで候

そ。五てう油の小路にて。とさとのゝ御宿と。尋て御入候らへよ。土佐殿と申は。法師の御名候か又俗のおなにてましますか。とねりか聞て打わらひ。今日此比関東にて。かまくら殿の御内に。いはうきはうとさはうとて。三人(6才)

の法師武者。ありとは国にかくれなし。知らぬは異国仁かなとからくんとそ笑ける。義盛聞て。さほとならぬ大名の。上洛ましく候か。国にひろうなき事はそらことなりといひたりける。披露なきこそ道理なれ。大事の敵をうつため。しのびて上洛ましますば扱こそ披露は世になけれ。大事のかたきとの給ふは。天下のおかたき候か又私のしゆく候か。土佐殿の御身にあてゝなんじやうかたきの候へき。かまくら殿の御身に(6ウ)

てうつへきおかたき候よ。討れ給ひてそのうち。名字かくれよもあらし。南無阿弥陀仏と申ければ。よし盛ともに念仏して。さてはぎけいの御事と。きすまして義盛は堀川の御所へそ参りける。「コトハ」判官の御まへに参りいかにわか君聞しめせ。関東の土佐坊か君の御討手に罷上りたるよしを申。判官聞しめし。何あのとさなどを討手に上せらるゝ事はたゞ蟻螂かおのをとつてりうしやにむかふかことし。さりながら(7才)

時刻うつして叶ふまし。いそきつれてきたれ。承ると申て土佐か宿へ尋行。案内申さんとたからすかに呼はる。内よりたそとこたふる。いやくるしうも候らはす太将の御内のよし盛なりと申す。正尊きいてされはこそ人の耳は壁につき。眼は天をかくるとは今こそおもひしられ

たり。夕着たる正尊を。たれやのものか参り。御所にてかくと申つらん。対面せては叶ふまし此方へつれてきたれ。承ると申てよりもり(7ウ)

亭へしやうじける。やゝありて正尊は。大びやくえんをひくたいし。わたぼうしにてひたひを包。童二人に手を引れ。ていへよろぼひ出る。よし盛か対座にだうとゐて。久しう候義盛。たゞ今それかしか上洛は。別のしさいさらになし。関東の君の御れいもつての外にて候らへは。伊豆はこね三嶋若宮とのゝ御ほうへいは中く申にをよはず。都の内神々へも。色々の立願をたてさせたまふ。殊に取分候て。人数ならぬ正ぞんも(8才)

。みつの御山の御代官を給はり。熊野へ参り候か。はや老躰にまかりなり。瀬々のこり水身にしみ。近江あたりよりいれいを仕る。かゝる御祈禱の御為なれば。いれいと申ては。関東へ恐れと存知。おして夕上洛仕る。頓て参り此よしかくと申上んと随分存て候らへ共。いれいもいまた過ぎれば。不参申て候処に。義盛の御目にかゝり候事何よりもつてうれしう候。なにさま御酒を申さんとて。種々のさかなを(8ウ)

取出し。三々九度そしいにける。酒も半と見えし時。正尊申けるやうは。めんくの御中へ。いなかつとの有つるを。とりこしぬると存るなり。何かあるよし盛の御目につけよ。承ると申て。くら具足をそ引たりける。正尊是を見て。あら見くるしの鞍具足や。馬にそへてはなとひかぬ。兼て申せし「カ、ルツメ同」義盛の龍の駒はこしらへた

るか舍人。承ると申て。くろつき毛なる名馬の。五きに過たるを。宿の小庭に引出し。以前引たる(9才)

鞍具足を。まのまへにて取をかせ。此間の長旅に。爪をかゝせて存つれとも。是にめして御帰あれ。御所様の御きけんをは。万事は頼奉ると。まことしらかにたばかれは。酒にはたけき鬼かみも。とらくるならひなりければ。さしもにかうなるよし盛も。やす／＼とたはかられ。何事もか事をも。よしもりかくて候は。御所さまの御まへをは御心安おほしめせ。御在京の間に。重而まいり候はんと。暇を乞てよし盛は(9才)

堀河の御所へそ参りける。「コトハ」君の御前に参り。いかに我かきみきこしめせ。かまくら殿の御代官に熊野へ参ると申。くま野参りのだうしやなれは。さしもをかせ給へかし我か君とこそ申ける。ぎけいきこしめされて。日本一のよし経を。討に上る曲者にて。万事にきよくをかまへし。いかさまにもよし盛は。正尊にかたらはれぬると存るなり。いぶしう候お立あれ。向後対面申ましいと御座をたゝせ給へは。よし盛は(10才)

時の面目うしなひ。引出ものこそかたきよとて。馬をは尾髪を切て河原おもへおつはなし。たゝ一人きつて入。正尊とさしちかへんとそくるいける。其後弁慶を召れ。まことやらん関東の土佐坊か。某か討手に罷上りたるよしを申。五てうあふらの小路にあるときく。いそきつて参れ。弁慶承り。なに我か君の御討手に土佐坊めか罷上りて候か。いそいてくしてまいるへし。たゝ参れと申に参らすはくひをとつ(10

ウ)

て参るへし。ぎけい聞召れて。たゝ弁慶にものをいはせては。枯木に花のさくやうな。去間弁慶は。我か宿にかへり。あつはれ大事の御使と存すれば。胴丸とつて打かけ。ゆつて上帯ちやうとしめ。九寸五分の鎧とをし。一尺八寸の打刀を。十文字にさすまゝに。例の太刀さげはいて。くろき馬に白くらをかせ。引よせゆらりと打乗。わつは一入相くし。土佐か宿へ尋ゆき。馬をは庭に乗はなし。おちえんにづんどあ(11才)

かり。ことのしさいを聞ければ。正尊は義盛を。思ひのまゝにたばかり。今はとゆるす心地して。ちやういろこのみなみすゑ。さかもりしてそあたりける。弁慶是を見て。相のしやうじをさつとあけ。随分正尊の。うしろをそしらぬ弁慶にて。能ときすいさん申たり。なにさま御意のとをりをは。ちかふよつて申へしと。大せいひの兵者をのりこゑ／＼通り。土佐か対座にとつと居。めてのこうでをむんずととり。申せと御錠候て。それに(11ウ)

むさしを参らせらるゝ。「ツメ同」はや／＼お参り候らへとて。こかいなとつて引たてゝぢぢめかいてぞ出にける。大ぜいの兵者はそはなるうちものを。ひつたをし／＼。はゝきもとをくつろげ。すでにたゝんとしたりけり。土佐は聞ふる名仁にて。手こめにはせられつ。かなふへきやうあらされは。何をさわくそわとのばら。今にはしめぬむさし殿にて。ざげうことなくましますそ。しはらくそこにてさかもりせよ。やかて帰らん人々とて。宿の小庭(12才)

に出にける。土佐か郎等つゝいて出。あれまで御供申さんと。我もくゝとすゝみけり。弁慶是を見て。きやつばらにすぐめられ。あしかりなんと存ずれば。やめしもなきに推参して。武蔵めうらむなかつくゝと。大のまなこにらまれて。少ひらむその隙に。土佐かよわ腰むんずとだいて。くらつばにとうとをき。我が身もやかて飛かゝり。後馬にのつたりけり。弓手にて正尊か。袴のきゝわをむんすと(12ウ)

とつて。めてに刀をぬきすかし。さもあれごへんはいれいして。行歩こゝろにまかせずと。承りて候か。思ひのほかに引かへて。ちやういろこのみなみすゑて。さかもりし給ふあやしきよ。何事にのほりたるそ思趣を残さすはやかたれ。いかにくゝと有しかは。正尊ちつともさはがす。爰にてごへんと某か。問答たいけつしたればとて。理非をわくへき中でなし。(とて)御所へ参るうへ。あれにてしいしを申へし。しはらくまでや武蔵(13オ)

とて。駒をはやめてうつつほとにほり川に御所へ参りける。「コトハ」判官の御まへに参りはやくして参りたるよしを申。さすかに鎌倉殿の御代官に。くま野へ参ると申せば。ちかふめせとの御錠にて。中門まで召出され。讃岐円座をなげさせたまふ。正尊おめずなをりしきだいする。はうぐわん御らんじて。よし経か討手にのほりたるときく。せいはいかほともちたるぞ。いつくにかくしをきたるぞ。ありのまゝに(13ウ)

しいぞ。いかにくゝとの御錠也。正尊謹而申。某たゝ今の上落。別の子細候らはす。関東の君の御いれいもつての外にましゝて。伊豆箱根三島若宮の御ほうへい中くゝ申に及はず。都の内の神々へも。立願を籠給ふ。殊に取分て。人数ならぬ正尊も。三のお山の御代官をたまはり。くま野へ参り候か。はや老躰に罷成。瀬々のこり水(14オ)

身にしてみて。近江あたりよりいれいし。行歩心にまかせず候らへともかゝる御きたうの折ふし。いれいと申ては。くわんとうへのきこえもをそれと存知。おして夕上落つかまつる。やかて参りこのよしかくと申上んと随分ぞんじて候らへとも。いれいもいまた過ぎれば。ふさん申て候処に。よし盛を御使に給はる。きみの御いせいにおそれいれ。いもなをり候らへは。かみそり出仕つかまつらんと。門出いわお申ところへ(14ウ)

あの。むさし殿御出あつて。おさへてつれて御参あるか。関東より御言伝の御状なんとの候らひしを。もちて参らんと随分存知て候らへとも。臆病至極のくわじやはらにて。武蔵殿の御いせいにおそれかなたこなたへ逃さつてとうてんの其隙に取紛てもちて参らぬなり。諸事の次第をは。よし盛とむさし殿の。御覽せられて候。しきよくゆめく候はぬと。まことしらかにたばかりければ。日本一の義経も。二相を(15オ)

さとの弁慶も。まさる土佐にはたはかられ。実々それはさそあるらん。まこと汝にござらずは。精進次てに起請をかけ。正尊うけたまはり。御ゆるされだにあるならば。仕らんと申す。それくゝむさしと有しかは。

弁慶承り。くま野々牛王一枚に。硯をそへて出されたり。ときはきこふる文者にて自筆にかうこそかひたりける。「ヨミモノ」敬白天爵起請文の事。かみは梵天たいしやくしだひ天わう焰魔法王ご(15ウ)たうのみやうくわ下界の地には伊勢天照太神を始奉り熊野白山きふんせ王城の鎮守稻荷祇園賀茂春日八幡は正八幡大菩薩松の尾比良の尾梅の宮惣してえんぶだいの内の有情無情かうくたんの妄霊鬼神聞入納受垂給へ今度正ぞん君の御討手に罷上る事さらに候らはす又私のしゆくいさらに候らはすもし此事偽ならはた々今申をろす神爵明爵と正尊か四十(16才)

四のつきめ八十三のわうくく毎にまかり蒙り候て今生にては正尊か弓矢の冥加ながくすたり来世にては無間の底に断罪せられうかふよさらに有へからす仍状如件 文治元年卯月廿日藤原の正尊判と書たるはさて身の毛もよたつ計なり「コトハ」判官御覽して。まことにきせうもんはこまやかなり。神慮にまかせてかへすとて。正尊を宿へそ返させたまふ。正尊我か宿へかへり。とにもかくにもゆみ(16ウ)

取は。物をかくへき物にてあり。正尊文盲成せは。かたくくの御目に二度懸るへきか。あつはれ法師よき法師と。そゝろに身をそほめにける。去共よき次に。ほり川殿の案内を見あふせぬるこそ嬉しけれ。夕さりの夜半には是非にをみてかゝるへし。名こりおしみの酒もりせよ承ると申て。たかはらとうごをかきすへ。酒もりしてそあそひける。夜は何時そ八の比。はやよいそうつたて者共とて。てんでに車松をともし(17才)

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

つれ。堀川とのへおしよせおもての門を打破り。大庭さして乱れ入。あら口惜や。其夜ほり川とのには。御用心もまします。十二人の思ひ人を召れ。夜とともに管絃なり。かゝるあそひの折節。とのらは無益とて。皆々宿へそかへられる。武蔵坊弁慶は。北白川に宿有て私にかへり居たりけり「カ、ル」たまくありあふ人とは。女房達中居の人「フシ同」さてはしよくのものばかり。くうたてかりつる。時分かな「コトハ」十二人の思ひ(17ウ)

人のその中に。しつか御せん計こそ。宵に知らぬ女の。けこ見つるものとのおほしめし。夢も結はすまとります。用心してこそおはします。あんのことく夜討雲霞のことく乱れ入。しつかぎけいを見てあれば。前後も知らすふし給ふ。なふくくと起し給へ共。御返事もまします。実やたけき弓取は。ものゝ具の音に驚せ給ふものと。聞て有つるものとのおほしめし。御きせながを取出し。枕かみにさつくとをく。ぎけいかつはとおき(18才)

給ひ。ことさうくしや何事そ。しつか此由承り。夜討か入て候におきさせ給へと申。ぎけいきこしめされて。夜討といわんに何程の事の有へきそ。いかさま宵の正尊にてやあるらんに「フシ同」余り草臥今しはらく。休まんと給ひて又こそ休み給ひけれ「ツメ同」しつか此よし見参らせなふ。すてにまぢかく参りたり。おきさせ給へと申。きけいかつはと起給ひて。さらは物の具参らせよ。承ると申て。御きせなかをたて(18ウ)

まつる。弓手の小手をさし給へは。馬手をはしつか参らする。はい

だてとつておしあつる。物の具のわたかみとつて引立て。草摺長にさつくとめす。上帯しむるその隙に。甲をとつて参らする。忍ひの緒をしむるそのひまに。刀をとつてまいらす。さやからみし給ふまに。太刀をとつて参らする。帯取しむる其隙に。箆をとつてまいらす。かけ緒をとむるそのひまに。弓をはしつかおしはつて。す引つる音ちやうどしてぎけ(19才)

いに是を参らする。ぎけいこのよし御覽して。あつはれしつかは弓とみ。おもひものよとのたまひて。すでにすんで出給ふ。しつかもつゝいて出にけり。ぎけい此よし御らんして。いやさとうなりしつか。忍べくとの給へとも。耳にもさらにきゝ入す。まつさきにこそすみけれ。すゝむ姿を見てあれは。青黄匂の腹巻を。絹の下にそきたりける。きけいの秘蔵の白柄の長刀弓手のわきにかいこふで。たけなるかみをはつと乱せは黒母衣(19ウ)

やらんと見えにけり。「コトハ」判官御らんして四国西国の合戦にも。かほと面白き事はなし。謔もの事にて有ならば。あの庭におとり出。蝶と花との乱れあし。見てこそ心はすむへきに。やあこちへこよやしつかとて。「カ、ルフシ同」西の小庭に出給ふ。比はいつその比そとや。文治元年。卯月廿日の夜の事なり。藤花は松に懸り。色々の草花のかたきの火に色をまし。乱転したるあり様は錦をさらすことくなり。池の汀にのそむとき。しつか(20才)

姿は花ににて。いまた秋には。あらね共女郎花かと。うたかはる。「コトハ」判官御らんして弓と矢を打つかつてさんくにあそはす。

おもてにすゝむ兵者。十七八騎はらりといられ少矢ころを引たりけり。ぎけい此よし御覽して。弓と矢をからりとすて。御はかせひんぬいて。切て出させ給ふ。弓手をきけい切給へは。馬手をしつかきつたりけり。二人の人々の。爰をせんどゝきるほどに。おもてにすゝむよきつわもの。廿七騎切ふせ。きけい(20ウ)

しつか手をはひかへ。おちえんにつんとあかり。ことの子細を見給へは。手負死人のふしたるは。「ツメ同」あふ算をみたしたことくなり。かゝりけるところに。太將の御内なる。伊勢の三郎義盛は。きみの御ふしんかうむつて。七条しゆしやかにありけるか。夜討のよしを承り。胸丸とつて打かけ。上帯ゆつてちやうとしめ。一尺八寸の打刀。十文字にさすまゝに。三尺八寸の。いかもの作りのうち物を。するりとぬいて打かたけ。もみにまふて走りしか。堀川殿(21才)

につきしかは。みなみのもんにつつたつて。大音あげて申やう。今夜のようちの太將は。土佐坊にてましますか。かう申つわものを。いかなるものとおもふそ。太將の御内なる。伊勢の三郎よしもりなり。御身ゆへにそれかし。きみの御ふしんかうむるゆへ。手なみのほとを見せんとて。面もふらずきつて入。くびふたつとつて。君はいづくにおはします。義経是にひかへたり。これくへと有しかは。承ると申て。おちえんにすんとあ(21ウ)

かつて。ふたつのくびをさしあげ。きけいに是を見せ申。義盛かふる舞はたゝはんくわいもかくやらん。「コトハ」きけい御らんして。かたきに息をつかせては。かなふましいとの給ひて。又切て出させ給へ

は。弓手にしつかめてによし盛すかりつき申。こはいかなる御事ぞ。今はや熊井も源八も。定てまいり候はんと。いひもあへぬに門外に。呼はるこゑこそきこえける。去間弁慶。北白川の宿にありて。わたくしにかへり居たりしか。生れ(22才)

付たるずいさうあり。ことのあらんときは。むなさわきしきりにし。左の手をたにかきぬれば。はやことありとさとりをなす。今は此瑞相しきりなれば。もし堀川殿に何事か御座有らん。見てまいらんといふまゝに。どうまるとつてなげかけ。ゆつて上帯ちやうとしめ。夜るは杖こそよけれど。ぼうをついてそ出にける。せつなか間にはしりつき。ことのしさいをきくにあんのことく夜討うんかにみたれ入。弁慶これを(22ウ)

みて。扱は宵の正尊にて有やらん。土佐は聞ふる名人なれば。もし君や討れてましますと。心もとなさに。呼はるこゑこそ聞えける。判官聞召し。むさしかやあ是にありとの御誼なり。弁慶是をき。扱は心やすく候。かく有へしと期たらは。長刀もつてこうつるものを。持もならはぬぼうついて。いかゝはせんと存すれ共。人のもちたるほどに。浦山しさにこしらへたるか。彼武蔵かぼうと申は。嵐はげしき高山の。岩間より生出たるしらつげを。八(23才)

尺五寸につゝきつて。渡海わたるふなるのなりにこしらへ。はみねをやつてやいはをつけ。しそわかねをのべ。八尺五寸の其内に。八十三のいぼをすへ。釘の頭をみかきたて。はさまをくろくぬつたれば。いぼはかゝやく地はくろし。やいははしろし。ひとへに劔ひし銚。鉄杖

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

なんどの如くなり。かゝるめいよのぼうついて。ほり川との南の門につつたつて。大音あげて呼はる。今夜の夜討の太将は。土佐坊にてましますか。かう申兵者を。如何成ものと(23ウ)

思ふそ。太将の御内に。武蔵坊弁慶也。夜討の太将に見参せんと呼はる。かゝりける処に。あらひかわのとう丸に。火おとしの袖付たるか。三か月のことく一そりそつたる長刀を。ひらりくるりとまはひて。弁慶にかゝりけり。弁慶是を見て。むさしと名乗におこのけなく。かゝるはたゝものにてはよもあらし。名字を名のらせきかんと思ひ。只今爰元にすゝんたるつわものは。たうけかこうけか名字を名のれ聞んと云。光景きいて。ぢ(24才)

たい夜討のならひにて。名のるほうはなけれ共是は。私ならぬ夜討なれば。死てもめいよをせんために。けみやう計を名乗けり。陸の国の住人に。あねわの平次光景。歳積て廿六。八十五人か力なり。武蔵殿の手なみの程を。うけてみんと云儘に。長刀の石づきおつ取のべ弁慶にかゝりけり。弁慶是を見て。扱は汝は土佐か郎等よな。汝かしうさへあはぬかたきと存るに。そこを引とそ云たりける。光景聞て。さし(24ウ)

もかくれなきむさし殿の。御誼とおほえぬものかな。戦場にてのぞくしやうだては。さらにきかれぬ事ぞ。こゝろの剛なるものをこそ。武者とは申候らへ。我等こときのいやしきものゝうつ太刀は。よにある人の御身には。たつやたゝづやうけて見給へといふまゝに。弁慶か膝のまはりへ小風をふかせてさらりくとないたりけり。弁慶是を見

て。あつことなしとおもひ。ぼうをにわへさしをろし。いしづきをお  
どらせ。すそを(25才)

はらつてすねあての。おくびやうかねまねきのいた 「ツメ同」やゝ  
ともすれは光景もあふ討れつべうぞ見えにける。さる間光景。長刀は  
ひと手ならふつ。ぼうにあいては大事のもの。足かきかてはかなはぬ  
わさ。いかにもかたきをなぶりたて。ひらまんところを一太刀と。

こゝろの内にぞんずれば。かたきかかれは飛しさり。長刀の切手に  
は。おもてかへし芝なぎ。うしろをきるはなかきり。さゝなみきりに  
水くるま(25ウ)

。きりここみわきこみ。たゝくやみうちすてかたな。すいぶん大事の  
秘書の手を。のこさすこそはつかふたれ。弁慶あまりのやさしさに。  
しはらくうたであいして。おもしろい手をやつかふと。目をすまして  
そ見たりける。されともむさしにまさりたる。ひじゆつとおもふ手も  
なければ。いつまてをみてつみつくり。いとまとらせんさらはとて。  
ぼうのいしつきおつとりのべ。おかみ打にちやうとうつ。甲のからく  
りはらりとくだけ。落(26才)

花のことくちりければ。くびの骨か打こまれ。どうへくつとに多いつ  
たり。五十四郡にかくれもなき。あねわの平次光景も。むさしはうか  
手にかゝり。みぢんになつてうせたりけり。とさか郎等を見て。む  
さし坊にてあれはとて。鬼神にてもあらし。あますなうてや尤とて。  
まん中にとりこむる。弁慶是を見て。ぼうのいしつきおつとりのへ。  
八はうをさしからんで一はうへおんむけ。ひしほことをしやすつき

(26ウ)

さてくしざしといふものに。さしつらぬいてえいとなげた。柳桜松楓。  
四本かゝりの庭の内。ひらりくるりとおいめくり。池の汀のたゝかひ  
には。水鳥山鳥けたてつゝ。見参所たいのや。中門めんろうとをさふ  
らひ。こみいつつこみだいつ。むさしかぼうにあたるもの。いきてか  
へるものはなかりけり。かまくらにて正尊は。一騎は十騎十きは百騎  
にむかふほとこのつわものを。八十三騎そろへしか。たゝ十七騎に討な  
され。ゆき(27才)

かたしらす落て行。むさんやな正尊も。からゝいのちたすかつて。  
河原をさしておちけるを。弁慶とよし盛か。あとをもとめておつつめ  
て。からめてつれて参りたり。ぎけいこのよし御らんして。熊野まい  
りの正尊に。繩をかくるはもつたいなし。いかにゝとありしかは。  
正尊ちつともさはかす。いだけ長にのびあかり。大音あげて申やう。  
めいはぎによつてかろし。命はおんのためにつかはす。らいてうの御  
ためにすつる命(27ウ)

はおしからす。きみもにくしとおほすなよ。とくゝいとまたびたま  
へ。ぎけいふひんにおほしめし。あつかうなるや正尊。たすけたくは  
おもへ共。汝二君につかへす。さらはいとまとらせよ。うけたまはる  
と申て。六てう河原できりにけり。彼正尊を見し人貴賤上下おしなへ。  
かんげぬ人はなかりけり(28才)

## 【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(内)内閣文庫本、(藤)藤井氏本、(京)京都大学蔵一本、(慶)慶応大学蔵伝小八郎本

1才 ○近国隣国の大名小名の武士とも此由をうけ給はりー(他本)

近国(京・慶「諸国の」)大名小名(藤「かうけ」)関東よりの御上洛と承り ○くんこうけしやうにあつからんとー(京・慶)をんしやうかうむらんとて

1ウ ○なし今こそー(他本)なし四国西国は皆此君におもひつき申今こそ ○有へきとみなこのきみへおもひ付申すー(他本)ましますといつきかしつき奉る ○関東の梶原は此よしを承はりー(内・藤)すてにはや此事関東にかくれなし梶原今はかうそとおもひ、(京・慶)既に此事関東に隠なし梶原今はかふと思ひ ○いかに我が君きこしめせまでも御さうしこそいまたー(内)すてにはや御さうし、(藤)いかにわが君きこしめせすではや御さうし ○今こそかやうにましますともー(他本)其上此君(京・慶「ぎけひ」)かくて都に御さあらは

2才 ○内々打わらひおもふさまにしすましたるとおもひー(内)おもふさまにしすまし御前を罷立、(藤)今はしおほせて御まへをまかりたち、(京・慶)今はしおふせて

2ウ ○あんふかきものにてー(内・藤)土佐を討手にのほするならば案ふかき者にて、(京・慶)かれをうつてにのぼするならばあんふかきものにて ○いかに我が君きこしめせー(内・藤)ナシ ○

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

それー(他本)けふこの比

3才 ○実々それはさそ有らんー(内)実々、(藤・京・慶)げにくさるいはれあり ○尾張の長田か館にてー(内・藤)かうの殿の御供申尾張のおさたかたちにて長田か子とも、(京・慶)頭殿の御供申尾張の長田かたちにて御さいごの合戦に長田か子とも ○そこにても討れすしー(内・藤)ナシ ○かれをうつ手にのほせよー(内・藤)かれを討手にのほせよはやくくくとの御誑なり、(京・慶)かれをうつてにのぼすへしはやくくくとの御誑也

3ウ ○いち目笠にしでつけさせー(京・慶)ナシ

4ウ ○云ければ承ると申て堀川表に引出しー(内)下知すればさつしきともか乗つれて堀川おもてへ打ひて、(藤・京・慶)いひければうけたまはると申てさつしきどもがのりつれてほり川おもてにうちひて ○清水参りをしけるかー(内)ナシ ○此よし見るよりもー(他本)是をみて都にをゐて

5才 ○いかさま是はー(内・藤)ナシ、(京・慶)されはこそ ○おつさまむかふー(京・慶)尾かみあくまであつうしておつさまむかふ

7才 ○判官の御まへに参りいかにわか君聞しめせー(内)君の御前にかしこまり、(藤)しやくとりなをし申すいかに我が君きこしめせ、(京・慶)きけひの御まへにかしこまりいかにわか君聞召れ候へ ○何あのとさなどを討手にー(内・藤)何と申そなにかしか討手に土佐なんとを、(京・慶)何と申そ義経か討手に土佐なんと

を

7ウ ○いそぎつれてきたれー(内) いそひてくして参れ、(藤) いそぎ尋て参れ、(京・慶) 侄ひて連て参れ ○案内申さんとたからすかに呼はる内よりたそとこたふるー(内・藤) 物申さんとありしかは人を出してたそととふ、(京・藤) 物申さんといふければ人を出してたそと問ふ ○大将の御内のー(他本) 大将の御使に ○叶ふまし此方へつれてきたれ承ると申てー(内・藤) あしかりなんいそきこなたへしやうせよ承ると申て若堂あまた出相、(京・慶) 叶ましいこなたへつれて参れ承ると申て若たうあまた出合

8才 ○久しう候義盛ー(他本) 如何に候吉盛久しう御目にかゝらす候 ○都の内の神々へも色々の立願をたてさせたまふー(京・慶) ナシ

8ウ ○瀬々のこり水身にしみー(内・京・慶) ナシ ○いれいを仕るかゝる御祈禱の御為なれはいれいと申ては関東へ恐れと存知おしてー(他本) いれひし行歩心にまかせす候へとももらて叶ぬ道なれば ○いれいもいまた過されは不参申て候処にー(京・慶) ナシ ○義盛の御目にー(他本) おもひもよらぬ吉盛の御目に ○種々のさかなを取出しー(他本) ナシ

9ウ ○かうなるよし盛もー(他本) たけき吉盛も ○何事をもか事をもー(京・慶) 何事をも誰事をも御所様の御ことは ○御所さまの御まへをはー(他本) ナシ

10才 ○君の御前に参りいかに我かきみきこしめせー(内) 義経の御

前にかしこまり、(藤) 君の御前にかしこまりいかに我がきみこしめされ候へさすがしやうぞんも、(京・慶) きけひの御まへにかしこまりいかにわか君聞召れ候へ ○御座をたゞせ給へはー(藤) 御座をたゞせ給ひみうちに入せ給へば

10ウ ○まことやらん関東のー(内・藤) まことやきけは東国の、(京・慶) いかに弁慶承れ東国の ○つれて参れー(内・藤) くして参れまいれといふにまいらすはくひを切てまいれ、(京・慶) 連て参れまいれといはんはんに参らすは頭をきつて参れ

10ウ 11才 ○なに我か君の御討手に土佐坊めか罷上りて候か…我か宿にかへりあつはれ大事の御使と存ればー(他本) あつはれ大事の御つかひかなさりながらあんの内に存れば

11才 ○胴丸とつて打かけゆつて上帯ちやうとしめ九寸五分の鎧とをしー(内・藤) 黒糸威の腹巻(藤「よろひ」)を草すりなかにさつくととき上帯ゆつてちやうとしめ、(京・慶) 一とま処につつと入とふまるとつてうちかけうはをひゆつてちやうとしめ ○例の大大刀さげはいてー(他本) ナシ ○引よせゆらりとー(他本) かるけにゆらりと

11ウ ○思ひのまゝにたばかりー(内) たばかりおうせ、(藤) たばかりすまし、(京・慶) やすくとたばかりすまし ○さかもりしてそゐたりけるー(他本) 酒もりなかはとそみえにける ○のりこゑー(京・慶) かきわけー ○申せと御詫候てそれにむさしを参らせらるゝー(他本) 申せと御詫の候ひつるいれいときこしめ

されてもりに武蔵を参らせらる

12ウ ○あしかりなんと―(京・慶) 叶間敷と

13才 ○正尊ちつともさはがす―(他本) 土佐はきこふるめいじんに  
て

13ウ ○判官の御まへに参り―(他本) 門外に駒をのりはなし ○ち  
かふめせ―(内・藤) 熊野参りのたうしやなればちかふめせ、(京  
・慶) 熊野参の道者なればまちかくめせ ○しきだいする―(他  
本) しきたひしかうへを地につけ赤面す ○よし経か討手に―(内  
・藤) いかによ(藤「あら」)めつらしや土佐坊まことやきけはな  
にかしか討手に、(京・慶) 如何に珍しや土佐房けにやらんきけは  
義経の討手に

14才 ○正尊謹而申―(他本) 正尊しやくとりなをし申す(藤「申  
す」ナシ)さん候 ○申に及はす都の内の神々へも立願を籠給ふ―  
(京・慶)ナシ

14ウ ○よし盛を―(他本) おもひもよらす吉盛を ○きみの御いせ  
いにおそれいれいもなをり候らへはかみそり出仕つかまつらんと門  
出いわる申ところへ―(内) 参候はんと出立候所にいまにはしめぬ  
五条のちよいろこのみ酒もたせ門出いわひ候を、(藤) 君の御いせ  
ひにおそれいれいもすこしなをしかみそりしやうじんつかまつ  
りて参らんと出たち候所に今にはじめぬ五でうのちよいろこのみさ  
けもたせかど出いはひ候所に、(京・慶) 髪そりしやうじ仕りまい  
らんと出立処へ今に始めぬ五条の女艶酒もたせかどていはひ候処へ

名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第十七号 二〇〇四年十一月

15才 ○関東より御言伝の御状なんとの候らひしをもちて参らんと隨

分存知て候らへとも……とうてんの其隙の取紛てもちて参らぬなり  
―(京・慶)ナシ ○まことしらかにたばかりければ―(他本)ま  
ことしらかに申す

15ウ ○まこと汝―(内・藤) みえたる事もなきさきにきりてすつる  
もむさん(藤「ふびん」)なりまことになんち、(京・慶) 見へたる  
過もなき物をきつてすつるもむさんなりけに―汝 ○にござらずは  
―(内・藤) すこらすは、(京・慶) すこさすは ○起請をかけ―  
(他本) 起請をかけゆるすへしとの御錠なり

16ウ ○判官御覽して―(内・藤) 義経こまくと御覽して、(京・  
慶) 義経御覽あつて ○かへすとて―(京・慶) けへすそはやかへ  
れとの御錠にて

17才 ○去共よき次而に―(他本) ナシ ○夜は何時そ人の比はやよ  
いそうつたて者共とて―(内・藤) 夜既に更ければ時こそよけれ  
人々はやうつたてといふまゝに、(京・慶) 夜もふけゝれは時こそ  
よけれ人々はやうつたてや尤とて

17ウ ○おもての門を―(京・慶) 西の門を ○あら口惜や―(他  
本)ナシ ○十二人の思ひ人のその中に―(他本) 荒口惜や酒宴に  
(京・慶)「皆々酒宴に」草臥て前後もしらすふさせ給ふ十二人の  
おもひ人のなかに

18才 ○用心してこそおはしますあんのごとく―(内) 相まつるとこ  
ろに、(藤・京・慶) あひまつる所にあんのごとく ○実やたけき

弓取は―(他本) 司土心におもひけるは実やたけき弓取は

18ウ ○何程の事の有へきそいかさま宵の正尊にてやあるらん―  
(他本) ことくしく正存にてそあるらん何程の事のあるへきそ  
19才 ○はいだて―(他本) 妻手のすねあてしたまへは弓手をしつか  
まいらするはいたて

20才 ○判官御らんして―(他本) 義経御覽して荒面白の合戦や候  
○四国西国の―(藤・京・慶) 四こく九こくの ○あの庭におとり  
出―(内・藤) 庭へ出たのあそひに、(京・慶) 庭へ出たのあそひ  
こそ ○かたきの火に色をまし―(他本) ナシ

20ウ ○判官御らんして弓と矢を打つかつて―(内・藤) 義経中さし  
を打つかわせたまひ矢さきにかたきはきらふましいと指とりひきつ  
め、(京・慶) 其後義経なかさしをつかんで矢さきにかたきは嫌間  
敷そうけて見よとの給ひて指取引つめ ○ぎけい此よし御覽して―  
(他本) ナシ ○切て出させ給ふ―(他本) 切て出させ給へは司土  
もつゝいて切て出る ○おもてにすゝむよきつわもの―(内・藤)  
手もとにすゝむ兵を、(京・慶) おもてにすゝむ兵者 廿七騎切ふ  
せ―(内・藤) 二十七騎きつて落したまふ残る兵風に木の葉の散や  
うにむらくはつと引たりけり、(京・慶) 廿七騎きつておとさせ  
たまへは残る兵者風に木葉のちるやうに村々はつとそ引たりける  
21ウ ○くびふたつとつて―(他本) 土佐からうとうともしうをかた  
いにうたせしとてまんなかにとりこむる吉盛此よしみるよりも大勢  
の中へわつて入さんくきつたりけりくひ二つとつて ○君はい

つくにおはします―(他本) 大勢に手をおほせ東西へはつとをつち  
らし君はいつくにおはします

22才 ○かたきに息をつかせてはかなふましいとの給ひて―(内・  
藤) 敵にいきをつかせて何かせんと、(京・慶) かたきにいきをつ  
かせしとて ○こはいかなる御事そ―(他本) しはらく御待候へ  
○今ははや熊井も源八も―(内) 今は武蔵もくまいも源八も、(藤  
・京・慶) 今はむさしもかたをかまくまもげん八も ○わたくし  
にかへり居たりしか―(他本) ナシ

22ウ ○夜るは杖こそ―(他本) 一尺八寸の打刀を十文字にさすまゝ  
にれいの大太刀さけはいて夜は杖こそ ○弁慶これを見て扱は宵の  
―(内・藤) よの者にてはあらし、(京・慶) されはこそ余のもの  
にてはあらし

23才 ○呼はるこそこそ聞えける―(他本) 君はいづくに御座候とよ  
ははる声にて候ひけり ○いかゝはせんと存すれ共―(内・藤) い  
かゝせん去間武蔵ばうにて人をまたうたすされとも、(京・慶) い  
かゝせん武蔵生れてより此かた棒にてひとをまたうたすされ共

23ウ ○渡海わたる―(内・藤) はしをひろく中をあつくとうかい渡  
る、(京・慶) なかをあつくはしをひく東海わたる ○はみねをや  
つてやいはをつけしそうかねをのべ―(他本) しさうかねをのへつ  
けはみねにやつてやいばをつけ ○ひとへに劔ひし鉾―(他本) 物  
によくくたとうればひとへにつるきのひしほこ ○今夜の夜討の  
太将は土佐坊にてましますかかう申兵者を如何成ものと思ふそ―

たまひて

(内) 唯今爰もとにすゝみ出たる兵をいかなるものとおもふそめつ  
らしからぬ、(藤) たゞ今爰もとにすゝんだるはめづらしからぬ、

(京・慶) 只今爰元へすゝむたる兵者は珍しからぬ

24才 ○あらひかわのとう丸に火おとしの袖付たるか―(京・慶) 洗  
河のよろひき赤綴の袖付なかふくりんの太刀はいて ○弁慶にかゝ  
りけり―(他本) おもてもふらすかゝりけり ○光景きいて―

(内) ナシ、(京・慶) 光景此由聞よりも

24ウ ○なけれ共是は私ならぬ夜討なれば―(藤) なけれ ○歳積て

廿六―(内・藤) 年つもつて廿八、(京・慶) ナシ ○うけてみん  
と云儘に長刀の石づきおつ取のべ弁慶にかゝりけり弁慶是を見て―  
(内・藤) うけてみんとそいふたりける、(京・慶) 請て見んとそ  
言たりけり弁慶きいて

25才 ○戦場にてのぞくしやうだては―(他本) 世にある人をたのむ  
はよのつねのならひなり戦場にてのぞくしやうたて ○いふまゝに  
―(他本) いふまゝに長刀の石つきききななかにをつとりのへ ○い  
しづきをおどらせ―(他本) 石つきをおとらせこのはかへしといふ  
手を出し

25ウ ○まねきのいた―(他本) まねきのいたはうの石つきからりと  
あて

26ウ ○まん中にとりこむる―(内・京・慶) 真中につとりこめひ  
みつになれともうたりけり

28才 ○ふひんにおほしめし―(他本) 不便におほしめし涙をなかし